

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可  
令和七年十一月一日発行（毎月一回一日発行）  
第二十四卷 第八号（通卷二八四号）

# 万象

B A N S Y O

十一月号

2025.11



十一月の句

冬ざれや小鳥のあさる韭畠

与 謝 蕪 村

「冬ざれ」は、冬の風物が荒れさびたさまをいう。草木が枯れ、海や山など見渡す限りなにもなく見える寂しさ。

蕪村は韭の緑が満目蕭条たる冬枯れの野にわずかに生色を点じている構図にいたく画趣をそそられたものと思える。寒中の滋養に備えようとする小鳥をはじめ、韭のわずかな緑を救いにする生き物たち。その懸命の姿がいつそう冬の荒涼感を増しての一句。

蕪村論等で、彼の詩人としての目、画家としての目が「俳人蕪村」を造りあげていると識ると、よりこの句に惹かれる。

(増田幸子)

令和七年

十一月号

# 万象

BANSYO

やりたいことは、まだまだたくさんあります。  
私はどれも「できる」と信じています。  
信じてね、「ゴー」ですよ。

日野原重明

# 万 象

令和7年11月号

主宰作品 綾子の忌 ..... 江見悦子 4

万象の窓<sup>(44)</sup> 「省略」について 2 ..... 江見悦子 5

名誉顧問作品 文 月 ..... 小林愛子 6

## 風音集

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・中條 睦子  
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子  
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

風音散歩<sup>(36)</sup> (十一月号) ..... 小林 愛子 10

## 同人作品

江見悦子選 ..... 11

同人作品の佳句 ..... 江見悦子選 31

同人会だより ..... 林 陽子 32

穏やかな出来秋を ..... 9月の「万象」オンライン同人句会高点句

珈琲ぶれいく<sup>(66)</sup> ..... 33

佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞 (九月号) ..... 松原智津子 34

## 同人特別作品

布施 弁天 ..... 山本とく江 36

鳥屋 野 濁 ..... 高野 松風 37

特別作品評 (九月号) ..... 荻野加壽子 38

令和七年「万象」新同人発表	.....	万象俳句会	39
続・風のしをり <sup>②③</sup> 子規と私（十） 細見綾子	.....	編集部	44
万葉の抒情 <sup>②⑦</sup> 『万葉集』にたずねる抒情の源流 <sup>②⑦</sup>	.....	橋本 清	45
北から南から 俳句のまち石狩（北海道）	.....	竹重 富子	46
私のこの一句	..... 林 陽子・古川 京子・落合 裕子・福島 吉美		47
万象ノオト「葉」	..... 宮崎知恵美・田上ナツ子・松井 宣夫 有泉 正夫・佐々木 茂・大内 和憲		48
巻頭作家（十月号）プロフィール 辺野喜宝来（那覇）	.....	前田貴美子	50
<b>万象作品</b> 江見悦子選	.....		51
万象作品の佳句	.....	江見 悦子	62
新中央句会報（8月例会）	.....		64
ルビーの小函（十一月号）	.....	編集部・校正担当	67
東西南北	.....		68
令和七年度全国俳句大会 作品集	.....		
	.....	〈1〉	
	.....	〈29〉	

綾子の忌

江見悦子

(主宰)

きちきちや古墳の草を踏みゆけば  
夫置いて風に浮きたり夏の果  
新涼や風呂場のタイル洗ひ上げ  
秋日濃し三番町の谷の辻  
飯碗の白きかけらや秋の雷  
橡の実の無骨ずしりとたなごころ  
朝顔のうすむらさきや綾子の忌

## 「省略」について 2

江 見 悦 子

今年の7月、名譽顧問の小林愛子先生が第三句集「くれのおも」を上梓なさいました。誠にめでたいことです。憎越ながら、愛子先生の句を組上に載せて「省略」について考えてみたいと思います。

### 〈動詞の省略〉

一句の中にどんな動詞を使うか、いくつ使うか、全く使わないかで句の良しあしが決まると言われます。動詞を全く使わない句を、句集の中から挙げてみます。

いつもこの冬木の上を夕鴉 夕方になるといつも、眼前にある冬木の上の空を鴉がねぐらに帰ってゆく。動詞が省略されていることで余白が生まれ、読み手の世界が広がります。

クリニツク春ストーブの大薬缶 クリニツクという名前らしからぬ古い医院なのでしょう。春の肌寒い日、大きな薬缶が待合室のストーブの上で湯気を立てています。動詞を使わずにモノを畳みかけることで、リズムよく焦点の定まった印象の強い句となっています。

### 〈主語（主体）の省略〉

野分して子規の忌日を近うせり 〈野分して上野の鶯の庭に来る〉を下敷きにした句。台風

のあと、草がしだかれ枝の散らばった眼前の庭の光景に子規の庭が重なり、子規忌（9月19日）が近いことを思っている作者。この句の主体が作者であることは勿論ですが、主語はあまいで読み手に任されています。

俳句の前提として、「句の中に主語がなくとも、句の主体は私、我である」ことがよく言われます。愛子先生もいつも「句の中に作者がいらないとつまらない」と仰います。「くれのおも」にはまさに等身大の先生の姿があり、凝縮され単純化された句に生じる余白から、読み手は思い思いにイメージを抱き、想像の世界に遊ぶことが出来ます。

### 〈季語の力〉

喪心のすこし薄れて春満月 季語「春満月」の持つあたたかさ、瑞々しさが、この句の詩因を包み込んでいます。何の説明も要りません。季語の豊かさを信じる心、季語にゆだねる心こそ、「省略」の極まった句に繋がるのかもしれない。

文 月

小林 愛子

(名替顧問)

赤き実を舗道に散らし夏木立  
ふつぐらの鰻を食べに誕生会  
料理待つ涼しく息を整へて  
板の間をぺたぺたと来て水羊羹  
初秋やシャボンの泡の薄荷の香  
八十回数ふる敗戦遠き蟬  
諸便り読んで文月過ぎしけり

句集発刊を終えて



地虫鳴く

中村千久

(編集人)

眼帯の不敵な笑ひ日焼の子  
 夏果の海より韓<sup>から</sup>の人の骨  
 我が骨を納むる墓を洗ひけり  
 草の穂にちひさき風の生まれけり  
 寧<sup>な</sup>樂<sup>ら</sup>は秋古りし薬舗に箱階段  
 鍵穴の奥の暗がり地虫鳴く

ヒロシマ忌

福島せいぎ

(顧問)

蟬しぐれなむあみだぶつなむあみだ  
 はたた神太鼓叩きて阿波を去る  
 杖突けば影も杖突くヒロシマ忌  
 ちちははの墓へ注ぎし氷水  
 吾も犬も斜めに歩く大ひでり  
 大暑かなころもの襟に塩噴けり

月の夜

柳澤宗正

(顧問)

被爆樹の影さすあたり昼の虫  
 秋暑し雀砂浴ぶひとところ  
 すいつちよの声透き通る土間の闇  
 小さき山車曳いて母子の秋祭  
 部活終へ急ぐ家路や秋ともし  
 捨て船の影黒々と月の夜

夫の本

中條睦子

(同人会長)

嵐めく夜やひとりの黒葡萄  
 長き夜や積まれしままの夫の本  
 西空のいまだ明るき魂送り  
 途切れなく校歌をうたふ生身魂  
 涼新た芭蕉布にある海の色  
 祭笛遠退き海人の路地は秋

初紅葉

松原智津子

(北海道)

雨ごとに草木萎るる晩夏かな  
神域の池に浮く影初紅葉  
初秋の夕餉青磁に絹豆腐  
豊漁とや生き生き小肥り初さんま  
留守宅の葉陰に淋し葛の花

星流る

亀田やす子

(栃木)

ひと眠りして待ちゐたる月の蝕  
姉逝きてすでに久しや星流る  
草むらに巢の蜂の子を見つけたり  
刈り上げをまたずして逝く山田守  
ちちろ鳴くぱらつく雨の通夜帰り

蜻蛉の眼

沢辺たけし

(千葉)

徒長枝の天へ伸びゆく土用かな  
大空を見つめて碧き蜻蛉の眼  
山門の粗き木目に秋日濃し  
満月の暈かすめゆく翼の灯  
燈火親し老眼鏡になじむ鼻

黙 禱

吉中愛子

(東京)

いつまでも冷めぬ石塀凌霄花  
黙禱や日傘の中に身をたたみ  
川音を後ろに鮎を焼きゐたり  
成人の子へ少々の菊の酒  
濃きいろを胸に受け止め秋夕焼

葛の花

榎本文代

(神奈川)

板の間に踵張り付く朝曇  
弦替へてギターつま弾く夜の秋  
おだやかに過ぎし厄日の夕日かな  
秋暑し足場解かるる鉄の音  
バス停の屋根にこぼるる葛の花

秋風

神田美穂子

(静岡)

朝顔の色を数へて路地抜くる  
秋風を容れて姿見磨き上ぐ  
とんぼうの風を乗り継ぐとき光り  
こぞり出てひと雨欲しき貝割菜  
入り日今ゑのころ金を輝かせ

豊の秋

井村和子

(石川)

釣瓶井戸かこむ里人豊の秋  
ポン菓子の音弾け飛ぶ在祭  
十三夜行方不明の眼鏡かな  
有耶無耶に流す一言生身魂  
心底の念の合唱長崎忌

ただ今日の

前田貴美子

(沖縄)

美しく夏の日は暮れ我が病衣  
稲妻や試歩の廊下をまつすぐに  
おのづから献水の雨長崎忌  
浜砂を踏む八月の空の下  
ただ今日の波音聞けり秋日傘

## 風音散歩

㊦

(十一月号)

小林愛子

小さき山車曳いて母子の秋祭 柳澤宗正

「秋祭」であるが、春祭が農事の豊作を祈るのに対し、秋祭は新穀を神に感謝し、田の神を山に送る里祭が主であった。都市部では実感が乏しいので様々な形で楽しんでいる。掲句のポイントは「小さき山車」、子供神輿である。新開地は産土神を持たないので、町内会等が子供のために小さな神輿を用意、母と子が優しい声で路地を回っているのに出会うことがある。帰りに貰う駄菓子袋がうれしい。

黙祷や日傘の中に身をたたみ 吉中愛子

8月は祈りの月である。6日の広島、9日の長崎の原爆忌。15日の終戦記念日、人によつては新仏の盂蘭盆会と続く。

屋外で黙祷をすることになった。今年は未曾有の猛暑、熱中症予防のためやむを得ず「日傘」を使うことにした。不自由な空間でどこもない動作であるが、深々と祈りを捧げた。「身をたたみ」は渾身の思いからの言葉、句の眼目である。

おだやかに過ぎし厄日の夕日かな 榎本文代

立春から数えて二百十日目の9月1日頃は、昔から風雨の激しい日とされ、二百二十日と共に恐れられてきた。

現在は稲作も天候も変化したが、台風の襲来することが少なくないうえ「厄日」という言葉に心が引き締まる。やがて何事もなく終わった街の上の、秋の夕日が目に沁みる。

朝顔の色を数へて路地抜くる 神田美穂子

今の朝顔は、千年以上も前に中国から薬用植物として輸入され、美しかったので鑑賞花となり、その後種類も多い。

最近の朝顔には日除代わりの簾作りも目立つ。明け方に美しい花をひらくが、午前中に萎んではかない。コバルト色で昼も咲く大型の花は西洋朝顔。句は、多彩な朝顔につられて歩を進める。「路地抜くる」にかつての日本の面影を見る。

ボン菓子音の音弾け飛ぶ在祭 井村和子

秋祭、里祭、在祭、村祭等は農村が中心である。大きな社の禊や祓の行事から出発の夏祭とは趣を異にしている。

今日是在祭、青空の下に聞こえる「音弾け飛ぶ」ボン菓子に祭は一挙に活気づく。大人も子供も童心に返って菓子袋を胸に、香ばしくて温みのあるボン菓子は在祭にふさわしい。

ただ今日の波音聞けり秋日傘 前田貴美子

「ただ今日の波音聞けり」。人は、寄せては返す波音に心安らぐ。しかし句は「ただ今日の」の強い出出しに続く言葉が隠されている。同時発表の〈砂浜を踏む八月の空の下〉の「八月」がヒントか？ 真意はわからないが浜辺でひらく秋日傘に、過ぎ行く季節を感じさせる一抹の寂しさがある。

# 同人作品



江見悦子選

札幌 岡本敬子

手術場の涼気ガリバーがんにがらめ  
祭笛遠し病衣はゆるやかに  
白さうび富士に誓ひて婚きまる  
新緑の花嫁紅のしほり着て  
さやけしやリップルシーツの肌ざはり

札幌 林陽子

まなかひの湖を溢るる揚花火  
洞爺湖の空は瑕無き花火かな  
湖わたる風を待ちたる萩の花  
滝音に解くる友との蟬り  
暑き夜や道路工夫は多国籍

札幌 落合裕子

知床や一筋の滝うみへ落ち  
新緑へ麒麟は首を伸ばしけり  
ひらひらと玉蜀黍の花の揺れ  
蜜を吸ふ烏揚羽の翅の碧  
秋近し空いつばいに羊雲

札幌 濱谷和代

湿原の果て雪溪の利尻富士

葉隠れの紅蓮池を埋め尽くす  
籐椅子に母の気配か風抜くる  
熱帯夜ホラー映画を繰り返す  
渦巻のまま残る灰蚊遣香

札幌 大内 和憲

更地はやうねり放題草いきり  
夏落葉踏みてランナー疾く過ぎぬ  
ビート畑に不意の土の香雨のあと  
簾より高校野球の大音量  
新しき義齒を磨くや秋灯下

札幌 紅露 恵子

風折れのぼうたん強き香を放つ  
酌み交はす一位の杯や夕薄暑  
水平線 夏空の青海の蒼  
無造作に束ねし髪や猫じやらし  
サロベツの風音に立つ燕子花  
いつからか子の手の大きな墓洗ふ  
語り部の紺の作務衣や雁渡し  
漁火の真上に秋の月まろし

札幌 大内 マキ子

せり上がる丈を競ひて祭山車  
鏡台にきのふのままの秋扇

札幌 中鉢 弘一

猛暑の日ともに耐へんと花に水  
洞に生まる夏蝶森へ消えゆけり  
母子像を包む夕焼の暮るるまで  
虫喰ひの跡菱形に橙落葉  
墓洗ふ墓標の掠れ塗り替へて

札幌 北浦 詩子

暑中見舞送るポストの火照りかな  
熱帯夜淀む空気のかく重し  
後れ毛の頬に纏はる暑さかな  
賢治まね天ぶらそばにサイダーを  
岩山を駆くる子鹿の斑の薄し

江別 佐藤 哲

大夏野長き貨車より牛の声  
下校の子野火の匂ひを滲み込ませ  
沙羅の花峡のうす日を集めたる  
沼明けて夏鴨空を真黒にす  
錆びはきし鉄塔の先稻の波

江別 太田 佳美

家中に居場所を探す溽暑かな  
憧れし師の初盆に絵蠟燭  
夏座敷富士の掛け軸背に座せり  
藍浴衣の親子三代帯は黄に  
街路樹に風鈴吊るすカフェテラス

新潟 高橋 ひろ

木下闇いよ濃くして山の雨  
稲刈機へ乗せてもらつてゐる子かな  
警備艇出て舟渡御へ挙手の礼  
硝子戸へ泥跳ね五分間の喜雨  
齒の薄き下駄履いてゐし敗戦日

新潟 高野 松風

早暁の色染まりくる星涼し  
根方おほふ袴のごとし竹の皮  
下闇や鴉は嘴をあくるまま  
錆色もまじりうすうす稲の花  
対の供花矢羽根芒を加へをり

益子 光岡 れい子

炎天へいづるや気合ひとつ入れ

持て成しは煮浸しの茄子濃紫  
めまとひに好かれて畦を三千歩  
草刈の闊ふ鎌に手の馴染み  
食前ののんどやさしき一夜酒

芳賀 大村 かし子

凌霄の花の明りや通路添ひ  
玄関に一緒に入る青蛙  
朝涼し指染めて摘むブルーベリー  
窓越しに迫る打揚火花かな  
研ぎ上ぐる菜切庖丁涼新た

宇都宮 阿久津 勝利

山百合の香の一山を包みたり  
百畳に千枚を干す夏座布団  
ケーブルカー雲の峰へと近づけり  
真夏日や庭師は水を喇叭飲み  
夏空へ立ち上がりたるはりか山

栃木 上岡 佳子  
※はりか山……那須烏山の伝説行事

冷房の茶の間でひとり甲子園  
句会果てハイビスカスの赤を買ふ  
新盆の座敷和めり子に乳齒

盆過ぎの客を見送る星一つ  
畦道の陽に重たさうねこじやらし

佐野 増田 幸子

のうぜんに朝の光を真つ先に  
ひまはりの茎たくましくごつごつと  
片かげり母と子で描く鉛筆画  
空蟬の小さき眼光りたる  
朝まだきほんに小さき鰯雲

佐野 加藤 季代

みどり児の足舐めてをり天花粉  
かなかなの遠く鳴き澄む忠魂碑  
落蟬のころんと生きてゐたりけり  
眼裏に花火の空の残りけり  
草の花紙飛行機の失速す

佐野 阿部 澄

ムームーも妣のおさがり盆用意  
落蟬の碧き斑紋色褪せず  
溶接のあをき火花や夾竹桃  
雁来紅砂利の間より盛り上がる  
龍淵に潜みし夜や深眠り

黙々と薔薇の手入れや帽深く  
紅蓮のかたはらに來て舟止むる

佐野 芝宮留美子

蓮池に舟一艘の道走る  
滴れり地下空洞の石切場  
鬼薊種つぎつぎと風捉へ

佐野 島田 和枝

明けやらぬ背山に蟬のかまびすし  
不揃ひに色づく葡萄軒に垂れ  
池涼しをさなに鯉の寄り来る  
山裾に沢音響く合歡の花  
昼暗し青苔被ふ馬場の跡

佐野 売野 緑

見霽かす田の面にきらら朝の露  
百日紅散る紅白の渦となり  
藍色の鉢にさぎ草五六本  
真つ暗な山間光る遠花火  
守宮の子壁の色して壁を這ふ

佐野 店網 洋子

木洩れ日のまだら狐のかみそりに



夕風や桶に漬けたるはぐら瓜  
舟下る岩をすれすれ秋日濃し  
山峽を赤い列車と秋茜  
秋初め秩父の札所巡りけり

足利 大木

茂

祇園会や三日三晩の雨を乞ひ  
土用芽の翳りまだらに塞の神  
精霊路仕上ぐる束の笹箒  
長堤を無人操作の草刈機  
対岸の社に揺るる踊の灯

土浦 澤

照枝

今年米予約の電話鳴りやまず  
和箏笛を秋暑に開けて柚の家  
昼食は瓜の早漬塩むすび  
花畑手入れ楽しむ図書館長  
墓参り幼なじみと擦れ違ひ

加須 茂木 弘子

煤けたる網代天井鮎の膳  
野州晴八嶋に開く青芭蕉  
沼の風一瞬乱す翡翠かな

噴水の水は静かに利根川へ  
ハンカチを眼に暗がりの映画館

さいま 山本 右近

古城めく湖畔のホテル小瑠璃鳴く  
お愛想を乗せて女将の団扇風  
遠雷や取り箸青き普茶料理  
八朔や顔認証のいま一度  
秋や今朝葉先に光るひとしづく

所沢 三好 かほる

空蟬の雨に打たるる石畳  
秋立つや木立ぬける風の音  
落蟬のなほ羽うちたる朝ぼらけ  
レモン切る蜂蜜漬の香にまみれ  
地下街の人出の多し終戦日

所沢 南雲 秀子

百日紅ダム湖の水位下がりたり  
高麗川にかかる木の橋鮎焼く香  
休田に湧き出づる如赤とんぼ  
重たげに青毬栗の波うてる  
白鼻心出るてふ噂夏の真夜

千葉 田 中 道 江

梅雨夕焼オランダ坂は海へ墜つ  
權に替へ橋くぐりたり花菖蒲  
廢線や鉄道草は花盛り  
Gパンと短パン千せり鳳仙花  
秋出水受話器押しあて問ふ安否

千葉 松 浦 陵 保

冷まじや青木ヶ原の樹海奥  
石鎚山の原水澄める仁淀川  
地球見む月面よりの星月夜  
地方にもそれぞれ味菊膳  
裾分けの西瓜や腹の十二分

千葉 喜多 恭 仁 子

きな臭き戦後八十年の夏  
広島忌被爆ピアノと八十年  
被団協の願ひ遠のく原爆忌  
飢うる子の大きなまなこ星涼し  
幼き日泳ぎし海へ帰省せり

千葉 大 月 玲 子

草引くに這ひつくばつて今日ひと日

白桃に刃を入るる時力抜く  
踊子の指先天に星まどか  
濡れ縁に投げ出す足裏秋近し  
手を挙ぐるだけの挨拶秋暑し

酒々井 竹 澤 竹 里

風吹かば稲穂はお辞儀したるかに  
秋風や我がふるさとは黄金色  
秋風にせせらぎを聴く朝の道  
秋風に人影増すや成田道  
蚊遣香腰にぶら下げ燻さるる

佐倉 大内 佐 奈 枝

校庭に土用芽吹けり被爆の樹  
モノクロの少女期ありて終戦忌  
束にして山車に吊りたり替草鞋  
引つつめて少し吊目や祭髪  
秋暑し背中合せの駅の椅子

佐倉 三 屋 英 俊

露地に風羅の背に扇紋  
白波の裾やおけさの藍浴衣  
日を浴ぶる桃やルノワールの乙女

川風になびく野菊や夕囃子  
棲ひよいと端折りひよつとこ踊かな

佐倉 横川 良子

暮れ泥む沼に小波秋に入る  
現世の戦は止まず星流る  
葬列を少し崩して日雷  
婚告ぐる声の弾みて紅芙蓉  
あれそれで成り立つ会話秋暑し

四街道 奥 太雅

水飲むに翅の開閉揚羽蝶  
廃れ田に残る一叢聖霊花  
葉の裏へ突き出る爪や蟬の殻  
川原の石白々と旱川  
落蟬に指差し出せば縋り付く

四街道 塗木 翠雲

千年の時空を超ゆる大賀蓮  
バス停の庇の陰の暑さかな  
泥を食み泥を吐き出す大蚯蚓  
朝顔市団十郎の勢ひ立つ  
蟻の列交通信号なかりけり

赤い花ほろほろこぼすさるすべり

船橋 山下 良江

朴大葉はたはたゆらす夏の風  
豆腐屋のらつぱの響き夏夕べ  
ひとしきり鳴いて止みたり蟬の声  
もの云はず夏草伸ぶる早さかな

船橋 赤堀 洋子

八月の太陽朝を独り占め  
雲流れ天辺に在る盆の月  
夕暮や大蠟螂が見え隠れ  
百日紅庭揺らすほど溢れたる  
夏野菜一株づつを庭いつぱい

船橋 久保村 淑子

夏料理スマホの孫を見せ合うて  
沼渡る蛇を大鷲睥睨す  
看護師の針差し直す残暑かな  
呼び鈴にまず犬の声御中元  
着水のクルードラゴン秋澄めり

船橋 片桐 帆一

土用芽の赤みおびたる楠大樹

新蕎麦や小諸城跡抜くる道  
街裏の非常階段臭木咲く  
野分中妻の見舞に急ぎたり  
伏す妻の掌に白桃のにはひたり

船橋 宮本加津代

しらじらと咲きて一夜の烏瓜  
遠雷や我が住むあたり雲低く  
大昼寝検診了へし安らぎに  
閉づる目に見ゆるものあり原爆忌  
残暑かな壁に動かぬ夜の蜘蛛

船橋 中嶋久登

夏祭大漁旗の湊埋め  
川に沿ひ池に戻るや糸とんぼ  
夫提ぐる金魚掬ひの二匹かな  
炎天の踵に隠れ己が影  
田の畔のどの穴抜けし朝の蟬

柏 山本とく江

苔みな凜と立ちをり蓮の風  
鈴の尾に空蟬すがる古祠  
消え際に音ついて来る遠花火

生家いま荒れ放題や百合の花  
良き記憶悪しきも浄め秋の雨  
柏 内田郁代

打水や根津の仕舞屋深閑と  
公園に一夜かぎりの盆踊  
三代が揃ひ迎ふる盆の朝  
赤は赤白は白なり百日紅  
綾子忌の近し咲き継ぐ鳳仙花

柏 古川京子

鴉の嘴酷暑を刻むかたかたと  
炎天や電柱影を短くし  
流灯会向きよくかはる濠の風  
湿原に染むる残照夏の果て  
朝風へ軍艦白き水を吐く

流山 穂苅照子

蓮ひらき風のはじまる朝かな  
一面の向日葵の背の淋しさよ  
静けさの芯に膨るる瀑布かな  
閉づるため蓮の花びら舟形に  
その中に黒き折鶴原爆忌

帰省子へ何でも包む新聞紙

東京 名和 政代

市ヶ谷の防衛省に月昇る  
斎の夜は故人の好きな秋茄子  
鷗外の脚気の記録虫干に  
街中は渋滞なれど鰯雲  
思ひ出の立体図面流れ星

東京 藤田 裕子

入道雲映る大窓洗ひけり  
もてなしは一杯の水炎暑来て  
サイレンの交響したる街極暑  
クルーズの大き広告秋気澄む  
マネキンに臙脂のブラウス秋立ちぬ  
小学校のチャイムを耳に墓洗ふ

東京 島野 ひさ

八月の太陽雲のなく暮るる  
空豆の匂ひなつかし母の味  
終戦日あの日のラジオとぎれがち  
井戸水で洗ふトマトを丸かじり  
雷の音だけききて今日も晴

東京 加賀 葉子

小太鼓の漆剝がるる酷暑かな  
ピアノの音漏るる出窓や花南天  
熱帯夜道路工事の赤色灯  
はふはふと秋刀魚香ばしおろし添へ  
枝豆を押し出す指のしなりかな

東京 久留島 規子

てらてらと灼くるポストに投函す  
湯気立つる玉蜀黍の粒の綺羅  
人逝きて早や新盆の棚のもの  
虫の音や火照るからだを横たふる  
街に人疎らとなりぬ盆の月

東京 下 嶽 孝一

ふと我に返る間が好き昼寝覚  
白壁に貼り付く影や日の盛  
雲海や大パノラマの浮かぶ嶺  
路地裏に風うづくまる日の盛  
もぐること終生知らずあめんばう

東京 草間 三香子

片蔭に溜息ひとつこぼしたり

根上がりの細りし流れ蟬時雨  
葉隠れの朝顔一輪こむらさき  
深々と真青な空や広島忌  
秋の雷土の匂ひの湿りたる

東京 岡村 純子

夏川や老いも若きも筏組む  
父の声したり大ぶり初西瓜  
初茹でのしろこしの香や母もゐて  
桜桃の丘ゆく風に吹かれけり  
雷雨去り静かに草の匂ひたつ

東京 桑原優美子

道迷ひ汗ばたばたとスマホ繰る  
緑蔭に影沈ませてねむる犬  
炎天の無口の列に並びけり  
をさなごの白く輝く夏帽子  
金魚売り金魚のごとき無表情

東京 三村 紀子

曲げわっぱ松茸飯のみつしりと  
草の市空き地は臨時駐車場  
ほほづきを一枝肩にレジにつく

脚立より見ゆる江戸川花火かな  
屋敷林黒々として遠花火

東京 小池 清晴

亀泳ぐ水面に群るる赤蜻蛉  
火袋に数多の裂け目盆提灯  
校門に合歓の咲きたる投票日  
蟬時雨手庇で見る草野球  
杭の上喉震はせる川鶉かな

東京 一由久美子

バス見えて閉づる日傘の骨の音  
襟元に鎖骨のくぼみ夏旺ん  
つまべにや瞳大きな影絵の子  
野の花も供花に足しけり墓詣  
川べりの風拾ひけり猫じやらし

武蔵野 砂地 宏子

母十六たつた一人の敗戦日  
青空の輝く今朝の原爆忌  
如己堂の影黒々と蟬時雨  
夕焼のなごり波頭に親不知  
万屋へ子の駆けゆけり青田風

※如己堂……長崎市水井隆記念館

立川 正田 華子

お稻荷を祀る墳墓や草の花  
秋麗コロッケ揚がる何でも屋  
花芒川原に選ぶ小さき石  
敗戦忌日を照り返す忠魂碑  
目玉焼焦げたる匂ひ今朝の秋

町田 広瀬 俊雄

捨ておきし人參の花咲きにけり  
せせらぎのほとり明るし九輪草  
青天に褪せることなし百日紅  
遠雷や勝頼自刃の生害石  
驟雨来て水煙立つハイウェイ

町田 桔梗 純

婚礼の写真を回し水羊羹  
海の日 of 空の青さや雲溶けて  
蜻蛉生まる八十年の広島忌  
子規描く色紙の桔梗涼新た  
つゆ草の青や小さき蝶の来て

日野 喜多尾 明子

休園の遊具の影や油蟬

夏暁の赤子ごきげんばびば  
写生の子てんでに散れる夏木立  
夜濯や雲しろじろと空埋め  
茶を熱く淹れなほせるも夜の秋

横浜 西本 才子

野の川に跣足の男の子稚魚掴む  
まだ暗く明けの静けさ油蟬  
芋畑二畝納屋の手前まで  
引き潮の渚鶴鴿叩きをり  
數原に低く群れなす赤蜻蛉

横浜 大橋 雅子

朝まだき動かぬ羽化の油蟬  
勢ひ良く大葉食ひゐる大蟻蛸  
バス停に青毬栗の転がり来  
秋夕日のきらめく朱色湾の空  
天井の木目のかすみ猛暑病む

横浜 山崎 郁子

潮風に頬なぶられてソーダ水  
子の庭の酷暑に熟すブルーベリー  
夏濤に顔出す海女や能登の海

夏の雲敗れし球児の目に涙  
引き潮の磯に海胆割り啜りをり

横浜 三木 豊子

塗り下駄の爪先立ちや阿波をどり  
白百合を胸に抱へて夫の墓  
ひまはりの浴衣の少女ズック靴  
蜘蛛の囲の雨粒光る狐雨  
羅を一気に脱ぎて深き息

横浜 星野 信子

向日葵の迷路は風の通り道  
一雨の来さうな気配西瓜切る  
星涼しワイングラスに満たす赤  
上を向く円空仏や晩夏光  
炎天の食品サンプル蕩け出す

川崎 新妻 奎子

打水をして路地奥の古物商  
血糖値測る平穏原爆忌  
小夜更けて声の強まるつくつくし  
秋暑し池面に鯉の影も無く  
大南瓜我が包丁にあまりけり

川崎 大久保 進

向日葵やモディリアーニの長き首  
しやわしやわとG線上の蟬しぐれ  
相老いて言はず語らず夕端居  
秋立つや港の見ゆる風の丘  
素風立つ工事現場の仮囲ひ  
人の世の戦禍災禍やいほむしり

鎌倉 恒川 清爾

雨戸打つ明けの疾風や秋近き  
寺巡り冷し中華に長き列  
八朔や舞妓の首に日焼け止め  
八十年変はらぬ海よ敗戦日  
流灯やここは戦禍に人も焼け

伊勢原 佐藤 和子

雲が雲追ひかけてゆく夕立あと  
江の島の塔の点滅天の川  
ざら紙の父のメモ帳敗戦日  
田を巡る水音かすか処暑の暮  
韭の花昼の鶏鳴遠くから



静岡 大村 峰子

師の忌近し秋海棠に花芽立つ  
幼名の路地を飛び交ふ盆休み  
かなかなの声に夕餉を急かさるる  
打水の終の一杓円描き  
夕顔や独身寮に灯の点る

静岡 海野 みち子

空蟬五つ枇杷の葉裏にしがみ付き  
池の辺に森青蛙の泡三つ  
閑伽水をめんばに満たし墓参  
輪に入りて手足遅れて踊りけり  
廃校の尊徳像に小鳥来る

静岡 宮崎 知恵美

のうぜんの真つ赤に燃ゆる柚の家  
汗みどろの作業着重き樵かな  
みやげ屋に日暮近づく合歓の花  
高波を背にサーファーの滑り来る  
錆色に散りし小花よ百日紅

静岡 望月 敏男

氣に食はぬ孫の彼氏のサングラス

梅雨寒やそり返り飲む粉薬  
翡翠鳴け湖底の村に届くまで  
墓誌を読む墓に日傘を差し掛けて  
熊蟬の太古の貌と見つめ合ふ

静岡 藤原 千代子

吟行果つ蟻一匹を肩に乗せ  
雨蛙顔出す錆の水道管  
立葵いつもの空へ演習機  
人も猫も跨ぎて行くや子かまきり  
正調の夏鶯や父の墓

静岡 荻野 加壽子

池の面の風に頷く蓮青葉  
翅しまひ忘れし天道虫の死  
向日葵の黄の込み合へる暗さかな  
原爆忌ガラスの瓶の中の蟻  
雲水の御辞儀涼しき朝の門  
漆黒の海に波音敗戦忌

静岡 小川 明美

梅雨出水不動参りの声を消す  
ざりがにの泥の色して動かざる

木道の三叉路に来て鬼やんま  
火口めく湧水の底雪解富士  
師の墓へ土産話と甘藷焼酎

静岡 藤本 節子

麻酔覚め窓より仰ぐ夏の月  
落蟬のかすかな震へ朝まだき  
こはごとと空蟬はがす幼の手  
墳丘をなでゆく風やねむの花  
ビル街の屋上駐車雲の峰

静岡 大長 文昭

ポンプ小屋震へ青田に水を吐く  
山寺の瓢箪池に緋鯉の朱  
雨安居の僧の立居は風のごと  
雪加鳴く壁垂直の放水路  
紅型の赤の鮮やか慰霊の日  
酒蔵の甕覗きゐる薄暑かな  
どくだみの匂ひの残る母の靴  
朝涼や仏具あれこれ磨き上ぐ  
あーあーと鴉大声原爆忌

静岡 加山 ひさ子

暮れぎはの山やはらかしつくつくし

静岡 石川 裕子

包丁のどれもなまくら溽暑なほ  
起き抜けの夫の背拭ひ天瓜粉  
詰め替ふる胡椒こぼるる我鬼忌かな  
夕風や甚平の子の下駄の音  
やはらかに尼僧の読経盆供養

静岡 本多 ひとみ

飛行場跡地一面真葛原  
格子より秋日の入りぬ閻魔堂  
初盆や白檀の香の満ち満ちて  
蜚道を過ぐる潮風萩日和  
夕暮の真緒の芒そよぎをり

静岡 杉 澤 修

鐘響く牧場を渡る風涼し  
前山に土用太郎の雲の影  
背戸畑へ日の燦燦と梅筵  
朴の葉を鳴らして秋の雨白し  
秋蟬の雨を鳴きをり杉襖

射水 成瀬真紀子

すててこのリモートワーク膝に猫  
いつの間に大き足裏や昼寝の子  
父の字のメモある季寄せ土用干  
一湾を埋むるきらや土用あい  
立秋や乾ききつたる地へ豪雨

金沢 今越みち子

戦知るは四パーセント萩白し  
盆花を五百羅漢へ小分けして  
野菜売り荷台の隅に聖霊花  
高台寺七夕竹に雨意の風  
磴の先寧々の茶室や雪の下

金沢 伊藤美音子

先触れの早打ち太鼓虫送り  
吊るし干すウェットスーツ立葵  
舟虫や投げて弧を描く舳ひ綱  
夜濯の更紗模様の藍匂ふ  
空蟬のしかと摺める純子句碑

金沢 高田たみ子

先頭は村の悪がき虫送り

庭の草伸び放題や夏旺ん  
大き餌はこぶ小蟻や夏の果  
青芝に雀のあそぶコンサート  
蟬しぐれびたりと止みて豪雨かな

金沢 豊田高子

湯気取る白玉真白純子の忌  
沙羅の花香聞く夕の安けさよ  
蓮は実に利長墓所は風ばかり  
秋暑しきりり髪結ふ心意気  
終戦日ドック入りするイージス艦

金沢 松井佐枝子

百枚の窓照り返す大夕焼  
明々と天使のゐさう向日葵畑  
かなかなや御座の間にある武者隠し  
点るかに遠の白蓮野辺送り  
死ぬことを忘じたと呵阿生身魂

金沢 石川純子

横笛に風透き通る桐の花  
溶けさうな影を引きずる炎暑かな  
若者のペダル漕ぐ坂雲の峰

押し開く家紋ののれん秋の風  
湯の街の三味の音漏れく秋簾

金沢 河野 尚 子

球場の凹凸均す大夕焼  
大いなる息吐くやうに朴散華  
漁師町の更地を熱砂吹きあぐる  
早畑手押し車に水運ぶ  
鍬打てば卵抱く蟻右往左往

金沢 道場 啓 子

足元に堰の水音明易し  
堀歩く猫と目が合ひ五月晴  
百万石てふ珈琲や木下闇  
真青なる秋空綾子句集手に  
葛の蔓巻きからまりて秘湯まで

金沢 杉本 年 虹

美術館出て薔薇の香のかき水  
参道に水打つ男虹を生み  
約束のやうに鉄漿蜻蛉来る  
律の風舟梶模する家持碑  
遺骨なき墓石を仰ぐ敗戦忌

金沢 南 恵 子

茗荷の子エプロンに受け庭づたひ  
夕顔や暗がり坂は降りる坂  
土用芽の一寸ほどの真くれなる  
大旱空より烏ひと鳴きす  
喜雨のあと庭へ雀のにぎにぎし

金沢 松下 信 子

古戸棚置かるる三和土梅雨じめり  
山水画の余白にしばし金亀虫  
木々映し流るる水の綾涼し  
杉の秀に風を見てゐる夕端居  
郵便物来る日来ない日夕かなかな

金沢 北川 禮 子

地震の地に生くる決意や立葵  
木洩れ日の千体仏や杏熟れ  
子ら帰り夏空へ干すシーツかな  
青葉風藍甕の蔵開け放ち  
梅雨明や犬のロボットお手もして

金沢 清水英理 子

磨かれし漆の卓や今朝の秋

小振りなる母の手擦れの秋扇  
文机に香たく暮し秋初め  
晩夏光時の止まりし無言館  
かなかなや代々の蔵解体す

七尾 谷 渡 末 枝

緑蔭の風に躡く車椅子  
益荒男の喧嘩も能登の夏まつり  
墓黙す八十回目夏の空  
盆三日たつきの音に酢の匂ひ  
天の川墮つ漆黒の日本海

白山 加藤美栄子

戦跡の沖まで灼くる十五日  
舞ひ込みし蜻蛉放つ次の駅  
盲導犬のり込む車両ねぶの花  
ゆきずりの芸妓の香り涼新た  
白山をあまねく覆ふ天の川

敦賀 倉谷ます美

古町の喫茶に咲ける時計草  
ポーランドの林檎青みて敦賀港  
病葉を除く指刺すばらのとげ

米どころ罅われ走る旱の田  
夏の朝三和土に響く利久下駄

敦賀 鶴田 勝 子

現世の浄土となりぬ蓮の園  
川底を笊もてさぐる跣の子  
厨より老僧粹にかんかん帽  
初生りの胡瓜鴉に取られたり  
湯上がりの髪にとびくる金亀子

敦賀 中川 雅 月

幼子の上がり框の裸足跡  
草覆ふ過疎の田畑の夏深し  
師の自慢甘き樹成りの夏蜜柑  
磴百段登り切つたる大暑かな  
金亀子翅音激しき仕舞風呂

敦賀 中 村 優

三つ鋏の楔の抜くる早かな  
靴紐の結び目固く涼新た  
浮島に風を集めて蘆の花  
梅雨晴の雲の輪郭ほつれたり  
花カンナ錆びて穴あくトタン屋根

敦賀 為永香月枝

祖父帰る下駄音高く夏帽子  
水郷を流す船頭玉の汗  
鉛筆の音の涼しき句会場  
祇園会の稚児も大路の雨の中  
雲の峰故山の背に聳えたり

徳島 福島 吉美

葬終へし夜は雑魚寝や半夏生  
湯あがりの全身に打つ天瓜粉  
夏帽のままで演奏ピアニスト  
仏飯を供ふ足元小蜘蛛散る  
莊嚴華生けて注げる氷水

徳島 村上 和義

引つ張つて引つ張つて脱ぐ汗のシャツ  
右に跳ね左に飛んで阿波踊  
流灯のひとつ離れて沖に消ゆ  
応召の旗を広げて盆の月  
過去帳の表紙を捲る風涼し

徳島 宮西 修一

スーパーの店先に焼く鰻かな

懸命に言訳する子玉の汗  
天瓜粉湯上がりの子の逃げまはる  
漆黒の闇に眉山や揚花火  
川筋に読経流るる流灯会

徳島 平岡

功

奥祖谷の山小屋泊り星涼し  
噴水や飛沫小躍りして落つる  
夕立や水溜り跳ぶランドセル  
向日葵の千の笑顔や休耕地  
蟬時雨森の中なるドイツ橋

石井 木内 マヤ

庭石に喪の靴並ぶ盆の寺  
子が足を投げ出してをり夏座敷  
方丈に父の足跡天瓜粉  
脚たりぬ蜘蛛の太鼓に日照り雨  
初盆を終へてふるまふ茹で卵

小松島 岡田 あゆみ

高原に散らばる牛の影涼し  
巻き舌のオペラのパンチ夏旺ん  
切り口をきれいに揃へ夏料理

城山の焼夷弾跡蟬しぐれ  
牛の眼に映る真白き夏の雲

室戸 安岡みさき

敬老日女ばかりの漁師町  
大花火消えたる海の暗さかな  
ひからかさ差さず終ひや岬の寺  
滴りの落ちて微塵や水鏡  
風鈴を鳴らす海風山の風

福岡 宮田千恵子

箸置に箸休ませて麦酒かな  
蟬時雨山は豪雨となりゐたり  
天空に一瞬の闇大花火  
身のほどの願ひ大事に星祭  
白シャツをまくり屋台の灯の中へ

長崎 丸本祥夫

禅寺の大楠青葉五百年  
打水やしつとりしまる桐の下駄  
二階より高し小玉の枇杷たわわ  
風を切る喜び覚え夏燕  
石畳続く寺町油照

西海 山下敦子

吾が影はくの字のかたち法師蟬  
草いきれ記憶の果てのおままごと  
盆花を買ひに走るや十四日  
盆果てて波音高く近くなり  
もう照らんで青空怨む旱かな

宮崎 中山宣

新燃岳の怒りの癒えず秋に入る  
破芭蕉ミストの風に動きたる  
虫時雨厨の窓を全開に  
ちちろ虫寝間の明かりに出で来る  
秋暑しミスト流るる鵜戸の宮

宮崎 中山芳教

人訪はぬ墓石囲ふ曼珠沙華  
放置田の野草一面秋雀  
鵜戸の宮奇巖にまとう秋の声  
運玉うんたまの舞ふ潮風うねに秋の蝶  
梵鐘ぼんねうに直立※運玉……願い事をしながら投げる素焼きの粘土の小石不動竹の春

宮崎 鳥居達史

ことばし  
小灯をともして青き盆の月

自転車のペダルに絡む猫じやらし  
還暦の友のいつこく新生姜  
自転車に群れ来る蜻蛉閉校碑  
新生姜村翁がばと抜き呉るる

那覇 中 本

清

空蟬の草を離さぬ力かな  
折鶴に八月の空深くあり  
鎮魂の空に一刷け秋夕焼  
戦場<sup>いくさば</sup>に拾ふ小石や秋の風  
陶彫のオブジェに秋の穴ひとつ

西原 宮 城

勉

夏草の生え継ぐ母の今はの地  
あさがほの絵団扇の風もらひをり  
風抜くる島の抜け道島バナナ  
ほむら立つ硝子の都会大西日  
兵役の無き代に老いぬ敗戦忌

豊見城 渡 真 利 真 澄

宗悦の裂帖を観る秋隣  
染織店の主替はりし夏暖簾  
日盛や榕樹の下の囲碁教室  
炎昼を鳴き交ふ烏濁り声

父の爪母の爪切る残暑かな

ベリ 鈴 木 波 江

バス停に人待つ犬や花木槿  
鼻欠けのマリアの像や花煙草  
鶏の顔も馴染や種を採る  
網張りて洗ひ物干す蔦の家  
花舗小さし地にコスモスの鉢置き  
隣家の子いまや乙女に休暇果つ

### お詫びと訂正

9月号掲載の作品と記事に誤りがありました。  
お詫びして訂正いたします。

p 14上19行目と20行目

〈誤〉 夏空に真白なグライダー浮遊

〈正〉 夏の空真白なグライダー浮遊

〈誤〉 風涼し百人一首の格天上

〈正〉 風涼し百人一首の格天井

p 32上13行目

〈誤〉 秋山にてのひらほどの墓なるき

〈正〉 秋山にてのひらほどの墓なりき

p 43下11行目

〈誤〉 一番星夜店を一つを灯しけり

〈正〉 一番星夜店一つを灯しけり



# 同人作品の佳句

江見悦子選

祇園会や三日三晩の雨を乞ひ  
 お愛想を乗せて女将の団扇風  
 露地に風羅の背に扇紋  
 静けさの芯に膨るる瀑布かな  
 クルーズの大き広告秋気澄む  
 一雨の来さうな気配西瓜切る  
 人の世の戦禍災禍やいぼむしり  
 師の忌近し秋海棠に花芽立つ  
 翅しまひ忘れし天道虫の死  
 朴の葉を鳴らして秋の雨白し  
 いつの間に大き足裏や昼寝の子  
 山水画の余白にしばし黄金虫  
 益荒男の喧嘩も能登の夏まつり  
 応召の旗を広げて盆の月  
 鼻欠けのマリアの像や花煙草

大木 茂  
 山本右近  
 三屋英俊  
 穂刈照子  
 藤田裕子  
 星野信子  
 大久保 進  
 大村峰子  
 荻野加壽子  
 杉澤 修  
 成瀬真紀子  
 松下信子  
 谷渡末枝  
 村上和義  
 鈴木波江

同人会だより

穏やかな出来秋を

北海道 林 陽子

今夏は全国各地で異例の猛暑となっておりませんが、皆様如何お過ごしでしょうか。北海道も御多分に洩れず猛暑日が計12日に上り、北見市と帯広市では40度に迫る最高気温を観測するなど各地で危険な暑さが続きました。立秋もとうに過ぎ、暦の上では確かに秋なのですが、真昼に外出すると薄らと汗ばんだり。日傘もまだ手放せません。それでも朝晩は随分と過ごしやすくなり、夕方散歩のスピードを少し落としてみると、赤とんぼが風を切り軽やかに飛び、公園にうつすら黄色に染まり初めた春榆、赤みを纏うななかもどや楓が視覚に訴えかけてきます。道の駅にはずつしりと重そうな南瓜が山積みされ、丸々と太った道東の秋刀魚が今年は豊漁でお安く店先に並んでいます。相次ぐ豪雨や台風が気掛りですが、短い北海道の秋を穏やかに過ごせるよう心から願わずにはいられません。

北海道支部は札幌句会、北句会、清風句会、円山句会の会員27名で活動中です。いつも句会で良い刺激を下さる、90歳を超え尚元氣な先輩方の俳句を御紹介します。

一盛りに一尾おまけの初秋刀魚 松原智津子  
秋風裡はるにれの瘤仏めく 岡本敬子  
大漁の秋刀魚バケツで触れまはり 佐藤 哲  
一枚の空を染めゐる群れとんぼ 八代洋子

9月の「万象」オンライン同人句会高ポイント

3	3	3	3	3	3	3	3	3	4	4	4	4	5	5	5	5	5	6	7	7	8	8
鍵穴の中の暗がり地虫鳴く	とんぼうの風を乗り継ぐとき光り	火を囃し闇を囃せり虫送り	鳳仙花子は母となり父となり	もう行けぬ故郷はるか罌雲	読みかへす句集に付箋虫時雨	朝顔のうすむらさきも綾子の忌	秋風を容れて姿見磨き上ぐ	胡弓の音指の先まで風の盆	水打つてより花街の動き出す	ソーダ水またねと言ひて半世紀	コスモスやただ相槌がほしだけ	稲滓火の煙武州の雲になり	燈火親し老眼鏡になじむ鼻	新米のふはりと握る塩むすび	秋の蟬つられて鳴くも疎なる	靴底の熱冷めやらぬ敗戦忌	一滴を蛇口はなさぬ秋暑かな	きつぱりと山雨去りたり白鳥座	スマホ見る君よ花野に顔上げよ	夜の帳降すや烏瓜の花	被爆樹の影さすあたり昼の虫	爽籟や歩きたさうな亡夫の靴
中村 千久(志木)	神田美穂子(静岡)	荻野加壽子(静岡)	宮西 修一(徳島)	山本とく江(柏)	芝宮留美子(佐野)	江見 悦子(東京)	神田美穂子(静岡)	清水英理子(金沢)	村上 和義(徳島)	下嶽 孝一(東京)	桑原優美子(東京)	茂木 弘子(加須)	沢辺たけし(千葉)	桑原優美子(東京)	久留島規子(東京)	荻野加壽子(静岡)	山本 右近(さいたま)	古川 京子(柏)	成瀬真紀子(射水)	塗木 翠雲(四街道)	柳澤 宗正(横浜)	成瀬真紀子(射水)

(※句頭の数字は点数を示しています)



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に「リットウ（リ）・刀」の付く漢字を入れましょう。

9	剝	10	刺	11	列	12	分
5	刈	6	前	7	切	8	創
1	分	2	削・剝	3	割	4	切
1	やはらかに人□け行くや勝角力	高井几重					
2	小刀や鉛筆を□り梨を□く	正岡子規					
3	ひらひらと月光降りぬ貝□菜	川端茅舎					
4	古往今来□つて血の出ぬ海鼠かな	夏目漱石					
5	また一人遠くの蘆を□りはじむ	高野素十					
6	雄鹿の□吾もあらあらしき息す	橋本多佳子					
7	□支丹坂を下り来る寒さ哉	芥川龍之介					
8	鰯雲ひろがりひろがり□痛む	石田波郷					
9	女身仏に春□落のつづきをり	細見綾子					
10	鯛よりも目□のうまさ知らざるや	鈴木真砂女					
11	雪溪を講の一□横切れり	内海良太					
12	夕野□貝柱噛みひとりの酒	飛高隆夫					

【正解】

【正解】

おいしい俳句

第9回 嵐山光三郎

ラムネ湧く園遊会のいづみ哉 尾崎紅葉

紅葉は明治時代の小説家で、東京帝大同級生の山田美妙、石橋思案らと硯友社を結成し「我楽多文庫」を発刊した。艶麗洒脱な筆で小説『金色夜叉』を書き、人気作家となった。園遊会は多くの客を庭園に招くガーデンパーティで、屋外に模擬店や余興場を設けて客をもてなした。「噴水いづみ」からラムネが湧くというのはなんとも豪勢な作り話で「養老の滝」伝説を思わせる。

当時の文壇で紅葉に対抗しうる花形作家は幸田露伴ぐらいのもので、硯友社をひきいる紅葉の実力はなみなみならぬものがあつた。泉鏡花が紅葉の弟子になったのは十九歳のときで、紅葉は二十四歳である。小説家をめざして十七歳で上京した鏡花は、一年間東京各地をうろついたあげく、ようやく牛込横寺町の紅葉宅を訪ね、玄關番として住み込んだ。

紅葉が没したのは明治三十六年十月三十日。かぞえ年で三十六歳であつた。死ぬ五日前に「景気をつけようではないか」と葡萄酒を弟子にふるまつた。紅葉の句に「猪を得たり君一升を提げて来い」がある。鏡花は「紅葉と二人でちびちびとやりながらお伽をしました」と回想している。じつところ紅葉は酒に弱く、せいぜい盃三杯で眠ってしまった。

# 佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞(九月号)

松原智津子

またたく間利尻山麓海霧の中 瀨谷和代

利尻山は北海道北部、日本海に浮かぶ火山の島利尻を象徴する、利尻富士といわれる風光明媚な山。対岸のサロベツ原野から利尻富士の全景が見られるのですが、山麓まで覆う「海霧」は格別の風景であつたと思われます。俳句は「郷土、風土の文芸」。北は北海道からの挨拶句。

漁を待つ婆網小屋で三尺寝 佐藤 哲

漁業従事者も高齢化の時代とは言え、長年浜で働いて来た女性も、今も重要な、元氣な働き手なのです。漁獲を終えた舟の帰りを待ち、自分の網小屋でちよつとお昼寝。「婆」の年齢は不詳。多分出漁の息子の母親でしよう。

こがねむし起き直るとき脚騒ぐ 高橋 ひろ

「黄金虫」「金亀子」ではなく平仮名表記だったこと、「起き上がる」でなく「起き直る」であつたこと、「脚騒ぐ」であつたこと。これらの表現で、状態をより鮮明に思い描くことが出来、観察が行き届き、言語感覚が評価されます。

コシヒカリ植ゑて児童の泥の顔 阿久津勝利

児童が田植をするニュースは珍しくないのですが、令和の米騒動の今年は特別の感慨でした。新潟産特A米コシヒカリの田植に子供たちが泥んこになつて挑戦。日本の主食たる

「米」への意識を高めました。泥んこの子供たちに未来を託すしかありません。

片蔭を出でて短き影法師 加藤 季代

炎暑の昼下がり、少しでも強い日差しを避けたいと片蔭を探してしまいます。「此処で……」と片蔭を見つけてはと一息。汗を拭き、暫し氣を鎮め、再び日盛りに出た時の自分の短い影法師が眼目。お日様の動きが想像される一句。

口あけてはみ出してをり燕の子 三好かほる

「泥の好きなる燕」の子が、餌を求めて親の帰りを待つてゐる様子。「はみ出してをり」が多数を想像させ、今にも巢から落ちんばかりの賑々しさが伝わつて来ました。

わかり易く、共感が持てる素直な写生句と思いました。

畦道を滑る赤き斑やまかがし 奥 太雅

「やまかがし」は、全長70センチから120センチで、体に紅色の斑点がある。毒を持つ蛇と初めて知りました。その蛇が畦道を滑り、「赤い斑」を発見した眼前の景。

俳句が出会いの文芸であることが実感されます。

たぎる瀬に新樹の色の踊りたり 片桐 帆一

作者の立ち位置は、新樹を背にした川のほとり？ 始めのうちは瀬川の表情に氣を取られていたのが、風が来、背後の新樹が揺れた時、その新鮮な緑影が川面に踊っていると発想したので。優れた情景描写の一句だと思いました。

いくたびも空裏返し夏燕 穂 苅照子

夏燕が巣立つた子燕といっしょに軽やかに飛び回っている

のを見かけます。本来は燕が裏返るのですが、「空裏返し」と変換し、頭上の夏燕の軽快な動きがより強調されたような気がします。軽みのある一句、

地下道を踏み出す一步炎天下 加賀葉子

最近の気候変動はかつて経験の無い暑さで、言語を絶しますね。涼しい地下道から一步出る瞬間の炎天下の暑さを把握誰もが経験する生活体験の一句ですが、「踏み出す一步」が「猛暑日」の感覚を伝えていると感じました。

喪の家の葉桜を雨叩きけり 桑原優美子

「喪の家」と「葉桜」の取合せは時間の経過を感じさせますね。「雨叩きけり」は「悔み泣き」に通じるのかも。この心情句を深読みしてしまいました。

明滅の螢とびかふ天龍川 広瀬俊雄

〈螢火の明滅滅の深かりき〉は余りにも繊細な綾子先生の名句。しかしながらこの句、名にし負う天龍川の螢です。遠州灘に注ぐ一級河川を飛び交っている明滅の螢を眼前にした感動が伝わって来ました。一度は見てみたい情景です。

音涼し朝の厨の洗ひ物 藤本節子

「新涼や」と感動するほどの事ではなく、日常茶飯の厨事、季節の涼しさを「音」に託した軽みが新鮮に感じられました。たくさん洗ひ物ではなく、簡単に済ませながらも、「音」を楽しんでいたのではないのでしょうか。

街動く如くに太鼓尾山祭 伊藤美音子

加賀百万石、金沢の尾山神社の祭礼。繁華街香林坊を巡る

祭太鼓の列を、あたかも街が動く賑やかさと捉えた一句。

「風」発祥の地、尾山神社の境内には、綾子先生の〈鶏頭を三尺離れもの思ふ〉の句碑が建っています。

茶屋街の簾戸抜けきたる風柔らか 河野尚子

江戸時代の美しい町並みが残る金沢の茶屋街。「簾戸」は竹や葦を編んだ風通しを良くするため戸のこと。中七を「簾戸を抜け来し」としてはいかが？ その風を「柔らか」と把握した感性が素敵ですね。金沢の夏ならではの風物詩。

曾良の忌の奉灯ゆらす青葉風 靄田勝子

芭蕉の「おくのほそ道」のお供をした河合曾良は1710年6月18日に61歳で亡くなっています。芭蕉の先達として敦賀を訪れた経緯で、毎年行われている西福寺の忌日の句。碑に灯した奉灯をゆらす青葉風。曾良を偲ぶ気持が伝わる一句。

猿の群れよぎる国道遍路行く 福島吉美

最近バスを利用する場合もあるそうですが、この場合のお遍路さんは勿論徒歩、その国道を猿の群れが横切る景。どちらが道を譲ったのでしょうか。動物と人の共生が望ましいのですが、うかうか出来ない世の中になりました。

凱旋のごとく田植機帰りけり 岡田あゆみ

一年の野良仕事で「田植」は農家の最大イベント！その田植を終えて意気揚々と帰る田植機、まさに「凱旋」の気分をのせて農道を戻ってきたのでしょうか。手植えの時代から機械化された農業ならではの情景に万歳。

# 布施弁天

山本とく江

鳥声も木の香も失せし青嵐  
 風音と紛るるばかり蟬の声  
 静かさや木洩れ日弾く滝しぶき  
 向日葵に日へ向く遅速ありにけり  
 風に堪へ風止む刹那散る蓮華  
 蓮の花散りゆく水の静けさよ  
 大利根の夕日を包む蓮の花  
 夏草のおほひつくせり宮土俵  
 子鵜の甘え声抱く大櫓  
 筑波見ゆ弁天山の蟬しぐれ



柏市北東部にある布施弁天は、関東三大弁天の一つで利根川を眼下に筑波山を遠望できる景勝地にあり、嘗て志賀直哉も訪れ「雪の遠足」に描き遺している。現在では向かい合うあけぼの山（桜の名所）と共に、一帯があけぼの山農業公園となり、四季折々花の里として親しまれている。厳しい暑さの続く7月半ば、思い切って行ってみた。やや風の強い日でしたが、向日葵や蓮の花、森の中の滝など句材には事欠かない吟行でした。

# 鳥屋野潟

高野松風

木洩れ日の常磐木落葉うすじめり  
猛暑日や枝の落下の注意札  
ひとしきり囁るるごと蟬の声  
行く親に身じろぎもせず雀の子  
白鷺や一望の潟低くとび  
篁の幹に葉々影涼し  
下闇や脩竹ぼつと日の明かり  
きりもみの裏よりおもて竹落葉  
木洩れ日に身は大振りの夏の鴨  
夕焼けて一本松は潟の縁



古くから越後平野の湖沼は、その成り立ちなどにかかわらず、総称して「潟」と呼ばれてきた。潟は多くの動植物が生息・生育し、憩いや活動の場として「ふるさと」を象徴する存在。戦国時代には現在より多くの潟が点在しており、福島潟や鳥屋野潟などは、その頃から存在していた。鳥屋野潟（とやのがた）は、市街地に隣接し、貴重な自然環境を残す潟。遊水池としての機能を備えている。周辺には公園や公共施設が整備されている。

## 三番瀬

久保村淑子

初夏の地球の鼓動三番瀬

東京湾には嘗て広大な干潟が広がっていたそうだ。多くは開発の波に飲み込まれ埋め立てられて消失してしまった様だが、三番瀬・谷津干潟・小櫃川河口の三か所は市民運動によって残されたと聞いている。

掲句はこの三番瀬の景。「地球の鼓動」で干潟の生き物達の活発な動きが伝わってくる。「初夏」の季語と呼応。

海紅豆潮満ちはじむ三番瀬

こちらにも三番瀬。「海紅豆」はアメリカデイゴと言われている。だが和名の方が特徴を良くとらえている。深い紅色の花と「潮満ちはじむ」の表現が相まって波音も聞こえてくる力強い一句に仕上がっている。

ビル街の囲む薄暮の谷津干潟

作者の言葉に「長方形に取り残されたような干潟」とある。ここは30年前に「ラムサール条約登録湿地」に認定され多くの野鳥と出会える場として親しまれてきた。グーグルマップで見ると長方形の干潟の周りを今はビルや道路が囲んでいる。東京都市圏ゆえの風景だろう。この句にはこの干潟の未来に不安を感じている姿も見えてくる。

押し合ひて杭の亀の子一つ落ち

生を受けたばかりの「亀の子」。現実社会は厳しいのだ。作者はその一匹に焦点を合わせ句にした。一本の杭に群がっている沢山の子亀に、負けるなど応援している。そして俳人はそんな瞬間を決して見逃さない。

## 石狩野

中鉢弘一

一瞬の間動かせり青葉木菟

冬の「梟」や「木菟」と並び夏の「青葉木菟」も夜行性である。昼間はまるで作り物かのように動かないことが多い。しかし暗くなり始めると活動開始だ。作者はその時を逃さずに「間動かせり」と表現した。

隠沼に天地一転雨つばめ

「雨つばめ」は、春に訪れるスズメ目ツバメ科の「燕」とは違いアマツバメ目アマツバメ科の鳥。名前も姿も似ている事から間違ふことが多いが類縁は遠い。長い翼で高速飛翔する姿からカゼキリ、クモキリの異名もあるらしい。

それゆえに「天地一転」が生きてくる。草を揺るがし空高くへ消えていく姿が見えた。

てんと虫背に露ほどの日の光

漆のような艶々とした小さな背に思わぬ強い光を見つけた。しかしそれを「露ほど」と詠んでいる。もしかしたら見逃してしまうかもしれないこの場面をしつかり句に昇華させた。

闇に引く金糸一筋螢の火

実際にこの景を見ると光跡の美しさに心ひかれる。闇を縫う一本の金の糸が織りなす世界は幽玄でもある。ただ「一筋」は「ひと筋」或いは「ひとすぢ」と表記するのも良いのではと思った。

作者は石狩平野の広々とした世界を自身の目で見、自分の言葉で表現した。新鮮な刺激を提供して頂いた。



## 新同人発表

次の諸氏を「万象」新同人（令和7年11月1日付）に決定しましたので発表します。

松永 博子（静岡）

松井 宣夫（武蔵村山）

松田 好子（金沢）

入河 大河（松山）

奥澤よし江（市川）

井端 久子（金沢）

辺野喜宝来（那覇）

万象俳句会

## 新同人の皆さんへ

令和7年度、万象俳句会の新同人の皆さん、おめでとうございます。

「万象」に入会以来、句友と切磋琢磨されてきた、皆さんの積極性と持続力に敬意を表します。

「万象」は、「風」の結社理念を継承し、「俳句実作の態度・方法としての即物具象の写生」を基本に、今年は創刊24年目となりました。

新同人の皆さんを迎えて、「万象更新」という言葉通り、新たに全員で、「個性と新しみのある俳句」「詩として魅力ある俳句」を目指して行きたいと思います。

皆さんのそれぞれの句会での活躍が、「万象」全体の力となつて広がっていくことを期待しています。  
これから一緒に俳句を楽しみましょう。  
ご健吟を祈ります。

主宰 江見悦子



まつなが ひろ子 (静岡)

昭和31年 静岡県生まれ  
令和4年 句会初参加  
令和5年 「万象」 入会

〒422-9063 静岡県静岡市駿河区馬淵1-12-3

この度は「万象」新同人にご推薦いただき、身に余ることと存じつつ、感謝の気持ちでいっぱいです。

私は、以前、巻頭作家プロフィールで紹介していただように、退職後は友達に誘われビラティスも開始。そこに俳句が加わり、毎日がさらに楽しく充実してきました。

20代後半に勤務先で一緒だった故曾根満同人から、何度か誘われていた俳句。令和4年10月、重い腰を上げて向かった小島吟行で句会を初めて体験し、その面白さにはまり、その後、「万象」に入会。今日に至ります。

私は吟行が好きです。吟行では、句を披露する場が共有感で盛り上がります。同じ景を見ても、人により切り取る角度、表現が異なり、そこに面白さを感じます。

今後、自分なりの表現で十七音を紡ぎ、詩としての俳句をと考えています。その上で、取合せの句をどうまとめていくかを一番の課題として精進してまいります。



まつなが いりひこ 夫 (武蔵村山)

昭和33年 東京都生まれ  
平成18年 「万象」 入会

〒208-0013 東京都武蔵村山市大南5-31-3

東京の下町、工場地帯の外れの、自然に触れることの無い環境で私は育ちました。海の鯨は奇形、街には一本の桜も無く、雨が降れば放射能を含んでいるからと、直ちに避難。隅田川の真っ黒な水は、墨汁の工場排水が染めているとばかり思っていました。

それから半世紀が過ぎました。ある日、珈琲屋にある句会のリーフレットを眺めていると、声をかけてくれたのが、小松川句会の長谷川はるみさんでした。熱心な誘いに、一度だけ行つて、後は適当に断ればオッケーかな、と思っていたのですが、「十七音で芸術家になれる」という江見先生の言葉に感動したことが、俳句との出会いとなりました。初めての吟行会は子規庵でした。その時に綱島清さんから「選句されたらみんなを驚かすくらい大きな声で名前を言うといいよ」と教わりました。中央句会では佐藤晴子さんから「『万象』に休まず投句しなさい。そうすれば飛高先生もあなたの名前を覚えてくれるから」と助言されました。

いつか、みんなの腰を抜かしてみたいものです。名句で。



まつ 田 好 子 (金沢)

昭和26年 石川県生まれ  
令和元年 「万象」 入会  
〒920-1166 石川県金沢市上若松町113-1

この度は、新同人にご推挙いただき、ありがとうございます。

大病を患った子どもの世話に専念するため仕事を辞めましたが、平成20年子どもは死去し、心に穴が空いてしまいました。そんな時、平成22年近くの公民館で俳句会が始まり、誘われるままに参加しました。指導者は中條睦子先生でした。

先生のお人柄と御指導で、どんどん俳句に魅せられ、また良き先輩の方々や仲間恵まれて、俳句は心の拠り所のひとつとなっていました。俳句を考えていると、いつも作句力の乏しさを痛感し、それでも言葉を紡ぐ面白さに惹かれます。

寺院や神社、遺跡を訪ねて大好きな歴史に触れたり、学生時代から親しんでいた茶道華道美術鑑賞や博物館めぐりしたり、また大自然や生活の中から季節の移りかわりを感じたりしながら、心を動かしたことを俳句にしたいと思っています。これからもご指導ご助言をいただき精進します。



いり 河 大 河 (松山)

昭和38年 愛媛県生まれ  
平成14年 「万象」 入会  
令和21年 「りいの」 入会  
令和6年 「風信」・「櫟」  
〔本名 大〕

「中島俳句会」 入会

俳人協会会員・松山市俳句協会会員  
愛媛県松山市小浜甲185-2  
〒791-4502

この度「万象」新同人に推薦していただき誠にありがとうございます。

私が俳句を始めたのは、黛まどかの句集『B面の夏』を読んだ感動からです。縁あって、東船橋句会で俳句を学ぶようになり、それ以来、「万象」の千葉句会や、つばき句会で、吟行会や鍛錬会を通して、諸先生方の指導を受けました。感謝申し上げます。真間の継橋や手児奈霊堂のことは忘れられません。また、「りいの」の句会では、毎回上野を吟行したり、芸大や東大の構内を散策して、楽しく俳句を学ぶことができました。定年退職後、現在は愛媛県の中島という離島に住んでいます。俳句が盛んなところで、「中島俳句会」にて地元の人と俳句を学んでいます。吟行会、鍛錬会が無いのは残念なことです。今後とも「万象」つばき句会に投句を続けたいと思いますので、よろしくお願い申し上げます。



奥澤 よし江 (市川)

昭和30年 千葉県生まれ  
平成20年 「日航俳句会」 入会  
平成27年 「万象」 入会

〒272-0813 千葉県市川市中山2-18-3

俳句の他に書道と詩吟をやっております。長く続けておりますと、その道の奥の深さに気付かされ、好奇心の尽きることはありません。際立つものは何ひとつありませんが、一人コツコツ調べておりますと思わぬ発見をすることもあり、まことに楽しいものです。

散歩が好きです。道連れは石の声だったり風の声だったりします。コスモスやら虫の音が道を作ります。摂理に満ちた自然のあらゆる命、物に宿る魂に触れますと、自分もまた自然の命であるなあと思ったりしながら足を運んでおります。

平日は近くに住む孫たちの見守りをしつつ、彼らの自在な発想に我が脳のコリをほぐしてもらっております。週末は母の介護のため実家で過ごしております。

「万象」の皆さまとのご縁をいただき、皆さまがたの感性に出会えることが喜びです。

どうぞよろしくお願いいたします。



井端 久子 (金沢)

昭和21年石川県生まれ  
平成3年 「風」入会 終刊により  
平成14年 「白山」入会 終刊により  
平成16年 「風港」入会 終刊により  
令和6年 「万象」 入会

〒921-8034 石川県金沢市泉野町2丁目10-1

この度は「万象」新同人にご推薦いただき、誠にありがとうございます。心より感謝申し上げます。

昨年の能登半島地震と津波により、珠洲市、特に私たちの住む宝立地区は壊滅状態となり、避難を余儀なくされました。多くの方が亡くなられ、中川雅雪主宰の「風港」終刊もまたやむを得ない結果だったと思います。

金沢へ避難してから、日々暗澹とした中において「俳句はもうお終いかな」と思っていたところ、思いがけなく中條睦子さんより「万象」へのお誘いを受け、入会させて戴くことになりました。また江見主宰より直接お電話で、温かいお言葉やお気遣いをもいただき、ご縁の有難さを感じております。

平成3年「風」に入会してより、ただただ俳句の楽しさだけを追い続けて来たように思います。今一度、初心にかえり「即物具象」を心に作句できればと思います。

今は俳句の力強さをひしひしと感じている次第です。



べのき  
辺野喜 宝 来 (那覇)

昭和34年 沖縄県生まれ

平成21年 「ふう句会」「りの」入会

令和6年 「りの」終刊により

「万象」入会

〒903-0807

沖縄県那覇市首里

久場川町2-18-8 302

この度の「万象」新同人のご推挙、誠にありがとうございます。

27年前、沖縄出身の夫と台北から那覇に移り住みました。

俳句に興味を持ったきっかけは、夫の大阪転勤の時、毎日新聞「女の気持ち」欄・投稿者機関誌の会員だったので、「短歌・俳句・川柳」の俳句欄に目が留まり、沖縄帰任後に俳句を学び始めました。紆余曲折を経てもう20年弱続いています。

初心のころ、日本語が母国語でないため、俳句の魅力を感じながらも何度も挫折感を味わいました。平成21年に前田貴美子さん指導の「ふう句会」に入会してからは、俳句と明るく楽しく付き合ひ、作句を楽しんでいます。

出会うべくして出会えた俳句は私を励ませ、励まし、助けてくれました。夫を亡くした時、俳句が私を深い悲しみから救ってくれました。今後も句作を生きがいとして、ゆっく

り精進してゆきたいと思っています。

毎月25日発売  
定価1000円(税込)

# 月刊 俳句界 2025年 11月号

## 俳人たちの“横顔” ～別側面の魅力

特集

三橋鷹女…三宅やよい  
加藤楸邨…田辺みのる  
渡邊白泉…四ツ谷 龍  
桂 信子…吉田成子  
鈴木六林男…高橋修宏  
沢木欣一…荒川英之  
飯島晴子…奥坂まや  
波多野爽波…山口昭男

クラシマ 俳句界NOW 伊藤櫻子

特集 守・破・離

師の教え、自らの道

○俳句における「守破離」 高尾秀四郎

○私の「守破離」

西山 睦 藤本美和子 高橋健文

長浜 勤 山田真砂年 山西雅子

セレクション結社「朱鷺」 赤塚五行

【注目の句集】 阿部王一 『ゆけむり八景』

進駐陣 宮坂静生 青木亮人 坂口昌弘

川越歌澄 広渡敬雄 八田九郎 ほか

「俳句界」投稿欄 一流選者10名！  
充実の投稿欄



※一部変更の可能性があります。  
株式会社 文藝の森

お求めは…〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F  
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

# 子規と私 (十)

細見綾子

子規は、わりかた蕪村を好きだったんですね。蕪村は、実に即しているから、割合に空想的なところがない。で、蕪村の句は、蕪村以前の句よりもさらに大変客観的であることを推奨している。蕪村の句は、いつでも褒めています。

いま日本の俳句人口がだんだん増えているという話がございますね。どのくらいか私もわからないですけど、百万人くらいあるのかしら。私たちが先日、中国へ行つたとき、出迎えの中国の方に、日本の俳句人口はどのくらいですかと訊かれたから、大野林火さんが百万、私は一千万と言ったかなと思うんですけど、百万と言ってもちよつとびつくりしますね。そしたら、向こうの人が、そんなにいるんですかと言つてびつくりしてました。

俳句人口が増えるということは、悪いことじゃない。

その中は、玉石混淆であつても、俳句をたくさんの方がする、そして、伝承をしていく。俳句の伝承が途絶えると、なかなかよみがえつて子孫に伝えるということがむつかしいんじゃないかと思う。ものを美しいと見る俳句的な考え方、先刻申しましたが、美しいこと、美を感じることが最高じゃないかといったことがなくなつてしま

うと、それがまた芽生えるということはむつかしいんじゃないかと思う。

俳句というものを伝えてほしい。最も日本的なるものとしての詩、俳句、それがどうしても挫折しないで伝わってほしいと思います。(この稿、了)



(昭和六十年九月二十三日、松山市子規記念博物館で開かれた第二十回子規顕彰全国俳句大会の記念講演「俳句とは何か」の要旨)

「子規・写生―没後百年―」(沢木欣一編 角川書店)より抄出

## 万象基金のご報告

匿名	五口
伊藤美音子様 (石川)	五口
匿名	十二・五口

(令和7年9月1日〜9月30日・受付)  
「万象」の発展のため、大切に使用して頂きます。

万象俳句会

## 『万葉集』にたずねる抒情の源流 ②⑦

橋本 清

君に恋ひ いたもすべなみ

奈良山の 小松が下に 立ち嘆くかも (四・五九三)  
「あなたのことが恋しくて、もうどうにもならなくなり、奈良山の小松の下で立ったまま溜息をついたことです。」

笠郎女が 大伴家持に贈った相聞歌二十四首中の一首。

家持のことが恋しくて居ても立ってもいられなくなり、家を出てあてもなくさまよっているうちに、いつの間にか奈良山に来てしまっていた。奈良山は平城京の北に連なる丘陵地のこと。そのすぐ南の佐保の地に家持の家がありました。

恋する人の家の近くまで来ながら、小さく頼りない松の木の下でふと立ち止まり、深い溜息をついている。何の変哲もない風景の中で切ない恋に煩悶する自分。そんな姿を家持に訴えているわけで、そこにこの歌のあわれがあります。

人恋ふはかなしきものと

平城山にもとほりきつつ堪へがたかりき

これは平井康三郎の歌曲として知られていますが、元は北見志保子の短歌です。夫である歌人橋田東声の弟子で12歳

下の青年への、道ならぬ恋に懊悩していた頃の作。恋しさに堪えかねて家を抜け出し、さまよい歩いて平城山に来たが、やはりこの切なさには耐え難かったと嘆いているのです。

人は思いが胸にこみ上げて来て、それを持て余すようになると、普段起居する場所を離れ、新たな展開を求めようとすることがあります。

さびしさに宿を立ち出でてながむれば

いづこも同じ秋の夕暮

(『後拾遺集』秋上)

『百人一首』にも採られている良退法師の歌。草庵住まいの寂しさに堪え切れず外に出てみたものの、そこも見渡す限りもの悲しい秋の夕暮の風景が広がっていた。作者の胸に満ちる寂寥感が染み入るように伝わって来る歌です。

愁ひつ、岡にのほれば花いばら

(『蕪村句集』)

ふと作者の胸に湧いて来た憂愁。それを鎮めようと家を出て岡に登ると、茨の花が咲いていた。しかし、それが一層、胸を切なくするというのです。『蕪村句集』はこの句の前に、〈花いばら故郷の路に似たる哉〉という句を載せています。このあたりの関連を額原退蔵はこう解説しました。蕪村は少年時代に早く両親に別れ、また遠く故郷を離れて長いあひだ漂泊の旅をつづけてゐた。胸の中にはいつも郷愁の淡い感傷がやどつてゐたのだ。

(『俳句評釈』角川文庫)

## 北から南から

## 俳句のまち石狩

北海道 竹重富子

札幌市の北側に隣接する石狩市は、日本海をのぞむ石狩川河口に開けたまちです。17世紀初頭の慶長年間から、漁業やアイヌとの交易の中心として栄えてきました。

現在は海水浴場や観光地としても賑っていますが、石狩市は俳句とゆかりのある街なのです。

平成12年、石狩のシンボルとして、本町地区に弁天歴史公園が開園しました。公園と一体的に作られた弁天歴史通りは、道路が直線ではなく、うねうねとした曲線で、これは石狩川の流れを表しているのだそうです。

この公園に併設されているのが、「楽山居らくざんきょ」です。旧石狩医の離れの和室を昭和12年の建築当時の姿に移築復元したものです。しほり丸太を使った床の間をはじめ、意匠を尽くした純和風の造りです。のちほど紹介する俳句結社「尚古社しょうこしゃ」の句会や文人墨客のサロンなどに使われていました。

そして新たに枯山水の日本庭園が造られ、最近は何句会やお茶会のほか、写真撮影会などに利用されているそうです。公園内にはいくつかの句碑が建てられています。

俳の眼にちらつくやたま祭  
わが櫓の馬が大きく町かくす

井上 伝蔵  
高浜 年尾

先駆けのはまなすの芽の真紅  
石狩の冬が近づくボプラかな  
山笑ひ海はほゑんでゐる日かな

有馬 朗人  
嶋田 一歩  
嶋田摩耶子

井上伝蔵は、明治17年の秩父事件の中心人物で、石狩に潜伏していました。句には同志への想いが詠まれています。

小樽高等商業学校（現・小樽商科大学）に在学していた高浜年尾は、石狩へも訪れていたそうです。

公園から少し歩くと私設「石狩尚古社資料館」があります。「石狩尚古社」は、幕末の安政年間に創設された俳句結社です。当時繁盛した中島呉服店の店主らが結成し、明治から昭和10年代まで続きました。その歴史の中で全国の俳句指導者との交流も盛んに行われました。

中島家の蔵には、膨大な俳句資料や書画が遺されています。平成元年に中島家四代目当主が、自宅脇に私設の「石狩尚古社資料館」を開設し、それらを展示しているのです。

石狩は現在も俳句との関わりが深く、平成17年からは俳句コンテストが行われ、全国から寄せられる応募も年々増えています。弁天歴史通りには、コンテストで入選した作品の句碑が建てられ、通りのアクセントになっています。



## 私のこの一句

孕鹿身を任せたる地の温み 林 陽子

北海道に生まれ育ち、70有余年北国の雪に馴染んできたつもりでしたが、やはりどこかで春の訪れを待ち望んでいるのでしょう。雪解けのすむ3月、苫小牧の緑ヶ丘公園を散策中、日当りの良い土手の下萌えに集まっている10数頭の鹿の中に、子を宿した孕み鹿を見つけた時の感動をそのまま句にしたものです。

「早春から夏にかけての北海道の自然をおおらかに切り取り素直に表現した」と江見悦子主宰より、嬉しい評をいただいた、第二十回万象俳句賞「水の音」二十句の内の一句です。

湯上がり母の髪梳く遠花火 古川 京子

私が高校に上がった頃から、母は入院を繰り返すようになった。親族が交代で見舞うのだが、私は長女。父にも母にも頼りにされていると感じ、それに応えようと授業が終わると病院へ急いだ。病室の小さな浴室で入浴を手伝うのも私の役目。洗い髪を梳くと、か細い声で「ありがとう」を繰り返して、ほろほろと涙を零すその姿は今も私を離れない。

医師たちと心をついに看病にあたっても、母は少しずつ小さくなっていった。

母より30余年も永く生きた今、無念であったろう母に思いを馳せながら、「誰にもあんな看病をさせずに逝きたい」と願っている。

湖の空かき乱す大地鳴 落合 裕子

平成19年9月の作。苫小牧市に住んでいた私は、俳句の種を拾いにウトナイ湖へ何度も出かけた。

ウトナイ湖はバードサンクチュアリに指定されており、色々な鳥に出合える。ある時、汀に立っていると、突然空からガタガタガタと凄まじい音を立てて何かが落ちてきた。

大地鳴のデイスプレーである。この鳴は尾羽で風を切り大きな音を出すのだそうだ。雷鳴とも呼ばれる所以である。

何と言う奇遇であろうか、後にも先にもそれっきりの貴重な体験であった。

日脚伸ぶ部屋に膨らむ旅鞆 福島 吉美

今年3月、台北市で俳句大会があった。台北俳句会の五十五周年記念の祝賀会も同時に開催された。その時に、私が投句した一句である。この句は、台湾へ出発前の準備の我が家の情景である。台湾の知人への土産や思いつくままに、あれもこれもと詰めこんだ旅鞆はパンパンに膨らみ、運ぶのが大変になった。しかし、私の心は鞆と同様弾みっぱなしで、出発までの家事はどんなに忙しくとも、苦にならない。今回は、大学生の孫娘も参加して楽しい旅となった。台北俳句会を通じて多くの人にご縁を頂き、これも俳句のお蔭と感謝している。



## 薬好き

静岡 宮崎知恵美

私は小さい頃から薬が好きに変な子で、姉の薬を飲んで叱られたことも一度や二度ではなかったと聞いている。今となつては覚えてはいないが、粉だろが粒だろが、苦かろうが甘かろうが上手に飲める子だったらしい。年齢を重ねるごとに薬は増え、今や二か月に一度の通院の度にレジ袋一杯もの薬を貰っている。12錠の薬もいっぺんに口に放り込み上手に飲める。それは今も変わらないようで、まずい薬も効いていると信じて毎日飲んでいますが、その種類が減ることはなく、増える一方である。ある意味薬に生かされているようだ。

ちなみに注射も嫌いじゃない。小学校の頃は泣く子も多かったが、泣いたこともなく今では変わったおばあさんになった。

## 阿川佐和子の「心の湿布薬」

金沢 田上ナツ子

近頃年齢相応に肩や背の痛みの日頃より悩み、湿布薬が欠かせません。湿布を貼ると暫くすっきり爽やかで、痛みも和らぎます。それに運動も大切な薬なので、頑張ろうと思いますが、暫くは湿布薬が頼りです。

そのような折友達から阿川佐和子の著書を紹介されました。タイトルは「だいたいしあわせ」です。帯に「心の湿布薬」とあり興味津津、面白く楽しい文章と可愛い挿絵に一気に読み終えました。実は金沢の新聞に連載中のエッセイ集です。又その内容に驚いたのは、エッセイを始めた頃に能登の地震があり、現在も能登の復興に尽力されておられ、時々訪ねては支援や交流を続けているとのこと。感動と感謝の気持ちで読み終えました。作家阿川佐和子さんの心の湿布薬に癒され感謝です。

## コーカサスの秘伝

武蔵村山 松井宣夫

お昼時、テレビ番組では健康食品やサプリメントに関するコマーシャルを目にする事が多いように思います。有名人を起用し長年の痛みが嘘のように解消されたといった類のものです。しかしよく見ると小さな文字で「あくまでも個人の感想です」と表示されています。古典的な演出です。私が若い頃アルバイトしていた出版社で「紅茶キノコ」なるものを販売した事がありました。売込みはコーカサス地方の秘伝の健康と謳いテレビや他の媒体で取り上げられ、ずい分売れたようです。数か月後にはインチキ商品が露呈しましたが、誰も責任を取ること無く、世間も直ぐ忘れてしまいました。インチキ薬用品にご用心。個人の感想です。

## 飲む点滴甘酒の効用

佐倉 有泉正夫

8月の盆明けにゴルフに行った。気温36度の猛暑であったが無事ホールアウトした。予想通りゴルフ場の駐車場

はガラガラ、コースも大浴場も貸切り状態。ゴルフ場は丘陵コースで眼下に霞ヶ浦、北に筑波山を望む眺望の良い所。プレー後、水風呂に浸かりリフレッシュ。他人には、80歳過ぎにしては元氣だと半ば呆れ顔で云われる。

ところで、私は持病もなく薬には縁がないが、毎朝一杯の「甘酒」を飲用。この甘酒は、米麴から造りアルコール0の飲み物で、豊富な栄養素を含み、体の中からサポートしてくれる。

私の元氣の源は、多分、365日欠かさず作ってくれる妻の手作りの甘酒のお蔭と感謝している。

最近の我が家の風景

目薬も食後ですかと問ふ老婆

(某新聞の川柳から)

## 薬効顕著・低地ハスカップ

札幌 佐々木 茂

北海道では昔からハスカップが健康に良いとされてきた。ネットなどではハスカップを高山地帯に自生する植物としているが、筆者はその説に敢えて異を唱えたい。苫小牧市の東部とそれに連なる厚真町には、低地であるにも

拘わらず、良質のハスカップが自生しているからである。

やや古いですが、平成30年4月に現在の北海道胆振総合振興局が小中学校の社会科や総合的な学習用資料として纏めた「ハスカップ果実の成分の特徴」の概略ご紹介する

ビタミンC 1100gあたり 44mg

カルシウム 同右 38mg

鉄分 同右 0.6mg

ポリフェノールも多量。

7月7日はハスカップの日。ハスカップは二つの花から一つの実を結び、と、七夕頃収穫が始まることに併せて。

ああ……勘違い

札幌 大内和憲

私は歯科医院を営んで結構な歳月になる。日々診療をこなしていく中、先日患者に渡す薬の扱い方にひやりとする事があった。午前診療を終えた78歳の男性A氏からの電話であった。「貰った薬を坐って飲むとしたが吞み込めない」と言ってきた。歯を抜いた後の痛み止めの坐薬を渡したのだが……やっと思味が判明。A氏はなんと

坐薬は坐って飲む物だと解釈したようだ。「その薬はね、肛門様に入れる薬ですよ」と何度も伝えた。独り暮らしのA氏が理解できるかが心配だったが、指示どおりできた様でほっとした。この一件以来坐薬を渡すときは、「肛門様に入れる薬ですよ」とパーフォーマンスをして見せると患者もスタッフも大笑いするのだが、私は大真面目にこれからも続けるつもりだ。



## 「万象ノオト」投稿募集

▽3月号「リモコン」(11月末日締切)

▽4月号「血 圧」(12月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

## 巻頭作家（十月号）プロフィール



辺野喜宝来

（那覇）

樹々は濃く淡く五月の牡丹郷  
万緑の風音に人集ひたる  
産土の戦事遙かや朝螢  
昨年の万象賞応募作品、「五月の牡丹郷」からの数句である。

宝来さんは、7歳まで祖母の住む首里で暮し、両親の住む台湾で大学まで学ぶ。その後琉球大学での2年間の留学生生活を終える。1968年より台湾と沖縄の懸橋となる「中琉文化経済協会」の秘書を10年余勤めた。沖縄観光コンベンションビューロー台北事務所初代所長の辺野喜氏との結婚を機に、沖縄での生活が始まる。

宝来さんは創刊もない「りいの」

で学び、「りいの賞」を二回受賞している。2回目の受賞は、「りいの」創刊15周年の年であった。「りいの」は翌年3月で終刊する。受賞作品は二編共、御主人との闘病生活とその後の日々を綴めたものである。

「りいの」終刊後「万象」に入会。の学びは一からと会員としての道を選んだ。「万象」での発表作品はまだ少なく、本欄ではなるべく多くの彼女の作品を読んでいただきたく、「りいの賞」受賞作品の数句を載せる。

草稿の光の中の二人かな（平27）  
余命欲るやうにちぎりて蓬餅  
百日紅の中ありがたうこぼれた  
身の営のみな抜けて夏空へ立ち  
満ちてゆく永別の日の夏の月（今5）  
とうすみや誰にも会はぬ窓を開  
夏草に負けぬ命と引きにけり  
ていねいに簾を捲けり家売る日

本年「万象賞」次点の作品群は、沢木欣一「みやらび句碑」の立つ辺戸岬吟行での作である。

松籟や辺戸吟遊の春シヨール

春宵の帰り重たき句帳かな

巻頭と巻末の二句を掲げる。彼女は日日常の小さな出会いを、吟行での新鮮な出会いを、俳句という言葉に楽しみ真摯に学び、その学びをも楽しむ人である。句会での彼女のノートを見聞した句友が、そのメモの多さに驚いたと語っている。

短夜や付箋の増ゆる中にある  
10月号巻頭四句の内の一句である。正に作句する彼女の日常詠である。

「俳句に助けてもらいましょう」。

御主人を亡くされた彼女に、あの語りにかけた言葉である。俳句に向き合う彼女の姿勢は、常に次の一步を踏み出す力となっていたと思う。強い人である。そして出会いへの感謝を忘れない人である。「万象」との新しい出会いに、彼女の日々がより楽しい俳句との日々になることを願う。

（前田貴美子）

# 万象作品

江見悦子選



○は佳句に選ばれました。

○青あらし万年の亀薄目開け 市川 奥澤よし江

蟻ひとつ一目散に引き返す

青蘆の影よりふつと驚渡る

母の爪切りてはさすり合歓の花

○オクターブ上げて鳴き止む法師蟬 金沢 松田好子

炎帝の息吹きかかる此処彼処

ひと日終ふ瑠璃の小鉢に冷奴

月涼し逢ひたき妣の声風に

水球の水を打ちたる力瘤 那覇 辺野喜宝来

○遠き日の友の草笛まだ青く

獺の忌の近づく雨やトマト熟れ

蕃茄齧る津波警報鳴りやまず

※獺……詩人・山之口獺

竜舌蘭はね返す日の尖りたる 焼津 小梁洋子

草の上に蠅の子の湧くやうに

迷路めく寺の廊下や蟬時雨

○爆心地の夜を鳴きとほす鉦叩

ふるさとや海迄走る夏休み 横浜 岡 元枝

○おしろいや日暮の路地のかくれんぼ

本堂のがらんと暗き日の盛

夏の天指差す平和祈念像

湧水の光に群るる糸とんぼ 静岡 松永博子

紺青の泉の底の息遣ひ

夏蝶の木洩れ日につと吸ひこまる

○ざりがにの泥より目玉覗かせり

潮風に煽られてをり水旗 三鷹 高尾早弓

六角堂までの細道百合の花

○灯台の受くる朝影レモン水

秋の波防潮堤に音ばかり

採りたての大茄子黒く光りをり 札幌 石田 睦

夏の朝バジル摘む每香り立つ

K I P O P 流して洗車夏の夕

籠いつぱい原色溢るる夏野菜 島崎 洋

野を駆くる少年剣士の捕虫網

夕立の匂ひまとはせ猫帰る

ぐいぐいと素足で渡る川瀬かな 杉山 和廣

木の暗れに威風堂々大姥百合

風死すやゴスペル聞きて眠りをる

○浴衣着て背中丸みゆるゆると 杉山 鈴子

向日葵に強き背骨を見つけたり

くいくいと水面滑るやあめんぼう

大夕焼礼文の海を火の色に 札幌 園田 鶴子

はまなすに更に迫れる波食かな

朝顔に支柱継ぎ足す風の朝

水草のあはひに映る夏の空 竹重 富子

夏空のラジオ体操りすも来て

窓の下日かげにじつときりぎりす

年輪を残す大樹や夏の空 田邊 政代

炎天を揺らぐ電車や街静か

ビードロの花瓶の涼し夕まぐれ 土門 一平

側溝の底からなのか虫の声

憧れのサウナの水風呂暑気払

炎天下素早き子栗鼠見失ふ 土門 一

揚花火豊平川の土手に来て

公園に子らの声なき猛暑かな

冷房のバスに羽織れるシャツ一枚 八代 洋子

はまなすや島二つある日本海

ふる里の旅の終りのところてん

まなかひをよぎる古里終戦日 新庄 曾野部 礼子

炎昼や鉄錆匂ふガードレール

○棘生き生き籠いつぱいの初茄子

喉越しの良き笹の葉の水羊羹

会釈して浮かばぬ名前夏の雲

大江

安藤桂花

風鈴に青空写し風を待つ

どくだみを活けて客間に友を待つ

快速の通過待つ駅青田風

仙台

富田洋子

鰻食む老舗の梁の黒々と

○寺大暑竜の荒ぶる天井画

渋滞をびゆんと横切る夏燕

新潟

齋藤 信

炎昼の鴉だうだう道真中

旧友の介護話や秋の風

梅干を含む朝餉やあいの風

夏祭母へ土産のぼつぽ焼

夕間暮れ雲の棚引く敗戦忌

風鈴の千の音色や一の宮

西方に覗く青空梅雨の空

滔々と枝を流せる梅雨出水

梅雨めきて少し重たき半紙かな

海風の部屋を通りて三尺寝

父と子の信号を待つ片かけり

渋滞の車列のうねり夏の夜

妻愛づる窓に一輪庭の薔薇

金星や土俵へ飛ばす夏座蒲団

○孫の手をかたはらに置く昼寝かな

燕

渡辺志ま

一夜のみ大家族なり墓参

間のながき添水の音や夜の更けて

廃校に今満開の合歓の花

芳賀

稲川清子

期日前投票すませ氷菓子

無花果を供ふる夫の仏前に

夏の月男体山に上りけり

緑青の仏具を磨く梅雨籠

山百合を起こす和尚の草履下駄

炎天下カフェの御冷を一気飲み

福武幸子

緑蔭やジャズの流るるカフェテラス

ほつとせり日陰の長き寺の垣

寝転べば風の流るる夏座敷

鹿沼

渡辺利子

ばつさりと庭木を切れば雲の峰

夏雲の中へ鳶の消えにけり

みんなの静けさ今朝の雑木山

栃木

飯塚キミ

カップルの獅子のやうなる雲の峰

山田季聰

○紅薔薇や食堂隅の授乳室

醉芙蓉の枝切る孫の潔し 佐野 木村君子

迎盆しばらくぶりの三家族

半夏生ランチの店の庭先に

卒塔婆の墨の香強し百日紅

赤松の宿木突く眼白かな

○虹の橋隣の町へ懸りけり

プランターの艶の重たき初なすび

譲り合ひ下りる石段滝しぶき

彩雲や祭太鼓の桴揃ふ

細き月見上げてをりぬ大暑の夜

志木

汐見克彦

幼の手線香花火振りまはす

暑き日に食す熱熱水餃子

一斉に蟬の鳴き出す雨上がり

森山洋之助

広島忌テレビに向かひ黙祷す

花馬の飾りにしたき百日紅

○リハビリも効かず夏掛の上の手は

新座

多田英治

夏祭の音頭遠くにうたた寝す

蚊遣香ただよふ先を追ひかくる

地球儀の太平洋に蚊のとまる

千葉

加藤浩子

天頂の果てまで澄みて天の川

皮つきのままかじりたる水蜜桃

蛸やひと日終へしと思ひたる

千葉

高田みや子

若者やベダル一氣に花野まで

若者の真つ直ぐな問ひ原爆忌

露天湯の肩に落ちたる青時雨

酒々井

小林あけみ

みんみんの一番乗りの朝の声

煮浸しの茄子ふくふくと紺のつや

啞蟬のひっそり繋ぐ数年後

佐倉

新谷八郎

やや軽く腰痛体操熱帯夜

傘の影犬と分けあふ炎天下

○文机は林檎箱なり遠花火

有泉正夫

炎熱やホームベースの砂埃

四阿に忘れられたり捕虫網

今年竹庇にあたり曲がりたる

杉田富美代

窓開き木々むせ返る熱帯夜

夕立雲間が迫りて気忙しや

さよならの言葉もさらふ驟雨かな

鈴木隆久

海霧深き糶場の午後や猫眠る

耳涼し水琴窟のひと雫

右向きて左向きても熱帯夜

鈴木美根子



夕間暮れ白さ増したる沙羅の花  
鉢巻の大工手枕三尺寝

佐倉 米田敏子

薔薇垣の薔薇のこちらを向いてをり

山宿の灯のうすぐらき茸汁

少年の杖真新し水芭蕉

果てしなき植田に風の通りけり

畑中のばらに埋まるる農家かな

えこの花そおつとそつと散りてゆく

わが団地六〇〇名の敬老日

キッチンカー三台だけの秋祭

油蟬パヴァロッティとなりにけり

「虹ですね」人に言ひたき電車待つ

シーソーの軋みきこゆる夏木立

長々と叱らるる子の溽暑かな

動くもの消えて極暑の昼下り

○電柱の影の短き炎暑かな

乳呑み児の大きな欠伸さくらんぼ

途切れ無くひたすら啼くや油蟬

澄みわたる鉄風鈴の音色かな

松戸 石川幸子

早朝の太極拳や赤とんぼ  
あめんぼう忍者のごとく飛びにけり

かちかちと秒針刻む夜の秋

夏休み風の集まる駐輪場

星の間の「きぼう」の軌跡夜の秋

○飛驒川の鮎やきりりと化粧塩

山門に人人人や濃紫陽花

噴水の穂先の消ゆる虚空かな

忙しなきひと日の果つや夏の月

○靴底のぱくと外れし原爆忌

東京 安藤美酒々

夏負けや带状疱疹ぼつんぼつん

夢に出て寝具を直す盆の母

暑き日におでん売れたる面白さ

晴れつづく梅雨前線どこへやら

連日の暑さつづきや街閑散

独り身の入院準備汗流し

盆用意先祖の好む供物添へ

墓掃除大汗かいて終へにけり

退院のビールの美味さ夕暮るる

核いらぬ八月の空平和あれ

柏 鹿毛満子

村田由美子

大場八朗

燕木静子

燕木静子

渡部洋子

寿多映子

日盛の追善供養母偲ぶ

海沿ひに赤き氣動車雲の峰

東京

北口富栄

窓ガラス守宮は夜の訪問者

高台の仮説住宅秋の風

腕時計のバンドの裏の日焼跡

おちよぼぐちに冷たきゼリー含みたり

夏惜しむミストの中の子等の声

酒場へと連れ立つ二人夜の秋

訃報あり仙人掌の花ひそと咲き

秋隣挨拶交はす声やはらか

緑蔭へ足早に入る子連れかな

炎天や工夫の怒鳴る声のして

炎天を檀家まはりの僧衣かな

蜩の樹より暮色の広がりぬ

ブルーベリー摘む蚊遣火の煙る中

新聞紙の袋膨らむ葡萄棚

日照草青空の下広がりぬ

もてなしや酒水割りに冷奴

夏休みマニキュアの爪赤く染め

番付は関脇復帰喜雨の朝

齊藤孝夫

高野翠子

鶴田智美

中澤桃子

橋本紀代子

平子甲奈

七月や徹夜も時差も無き暮し

小田和正喜寿のライブへ駆くる夏

世界中戦止めよと広島忌

東京

平澤一宏

雨降らず艶なきなすを嘆きたる

連日の暑さに身体細りたる

日傘さし信号待ちの犬と人

前川昇

夏の朝犬に引かれて散歩かな

同期会一年ぶりの暑氣払

耐へ切れず男もひらく日傘かな

宮崎正義

朝蟬の輪唱追へる床の中

干からびてくの字となりし蚯蚓かな

答案を飛ばさじと置く青葡萄

調布

荒井仁

若き日を母繰り返す月見草

○夏座敷生徒の白き膝小僧

等々力の森の中より滝の音

三鷹

南場雅子

水音のやさしき溪やかき水

深大寺小さき川にあめんぼう

花木檣遣らずの雨に生きかへり

府中

竹村晃子

夏の果夕日の奥に星出づる

簗の向う側から秋の声

今朝秋の大きな産声三女かな 日野 松原悦子

○旧姓で呼ばるる里の踊の輪

秋晴や地平線まで放牧地

錆びし鎌葎の中に見ついたり 森島山 松井宣夫

○夜濯やをんな一人のランドリー

老農夫小銭並ぶる日焼の手

夏料理厨大きく窓を開け 育梅 横井一美

となりから貰ひし玉葉虫だらけ

遠雷や雨を運ばず音ばかり

料亭の塀越し紅の夾竹桃 横浜 大駒泰子

半夏生安曇野の水らつば飲み

ダグアウトフル回転の扇風機

白雲の急ぐ梅雨明東京湾 加藤和子

出て来たるハーモニカ吹く土用干

佐渡おけさ旅の踊の輪に入りて

秋草の盆提灯の影ゆらぐ 坂本具子

娘作る茄子の馬の足長し

墓所の土忽ち乾く炎暑かな

囀や恩師を偲ぶ玉鳳寺 柴田雅春

梅園に野点準備の高校生

面つけて手踊りの子や梅日和  
風一瞬矢車草のみなかしぐ 横浜 長野高朋

木下闇線香の香の漂へる

故郷の店に未だあり心太

けやき若葉隈なくぬらす小糠雨 豊 美佐子

青嵐マロニエの葉を裏返す

一束の赤つめ草や風香る

蟬の殻ブルーベリーをしかと抱き 茅ヶ崎 久保田富士子

オクラ咲く三つ四つ五つ朝な朝な

墓洗ふ母の背中を流すごと 大和 中谷由郁

煮梅売る目元優しき老眼鏡

雨宿り小さき花咲く釣忍

○行水のぼっこり白き子のおなか 伊勢原 山本カツ子

菜園の日々の彩り茄子の花

早朝のラジオ体操蟬しぐれ

ぬれ髪のままに夜風やソーダ水 松田 古谷悠紀子

かまぼこ屋店それぞれの夏のれん

高校野球熱風となる応援歌

子等走る上を離せりととぎす

白蓮の日を弾きたる鎮守池 静岡 飯田優子

釣人のうなじの日焼け黒光り

廃校の庭に鬼蓮鎮まれり

風薫る仁王の長き頭脳線

片方のピアスの行方夜の秋

蜘蛛の巣に顔を捕まれ畑仕事

翔平の快音とどく雲の峰

赤や黄の父の力作西瓜かな

男性の日傘の増ゆる神楽坂

子づれ牛食ひ残したり夏薊

金山の女郎屋敷の夏蓬

靴肩に渡れる沢の花山葵

絵扇の美人画どれもおちよほ口

駅までの道ゆつくりと白日傘

○顔ぶれの揃ふ体操秋立つ日

烏瓜ふうはり咲けり藪の奥

絵馬殿に玻璃風鈴の音満ちて

単線の青田の近江走りをり

鈍行の揺れに任せて盆休み

せせらぎのとろりと湧くや皐月富士

翅たたみ葉先ゆらゆら糸とんば

静岡 伊東文恵

海野俊彦

杉田義則

杉山千鶴子

杉山巳代

高井明子

昼飯の茄子漬の紺極まれり  
高橋 一夫

龍胆の一夜の雨に色増せり

山城を包む勢ひ夏の雲

吟行の靴紐直す夏の空

暑氣払牛肉に舌焦がしたる

柔道のコーチ論飛ぶ夕涼み

面接に背筋伸ばして立葵

氷屋の列に加はり日の暮るる

屋根を跳ね鴉の騒ぐ夏の夕

無人駅一直線に夏燕

本堂に盂蘭盆の経響きけり

七夕竹に球児願ひを認むる

改札を抜け炎天のただ中へ

巢立鳥身を寄せ合うて枝の先

柿田川噴井の底の瑠璃の色

初蟬の殻のひとつを残しゆく

風鈴の海風抜けて鳴り止まず

噴水のしぶきにをとこ寝ころんで

苔の花けふ老木の伐られたり

路地裏に子らの戦ひ水鉄砲

静岡

田中秀幸

筑地裕子

内藤允昭

中澤祐一

永田公香

野崎浩子

早朝の蟬の合唱 山目覚む

初蟬の普請の音に掻き消さる 静岡 長谷川洋子

糸蜻蛉湧き水の砂蝨ける

藻の花の川に飛び込む幼かな

動きさう蟬の抜け殻柵の上 矢野喜久江

朝一番我が家訪ぬる守宮かな

安倍川の鎮魂の碑に赤とんぼ 鈴木美由紀

木洩れ日の濠に翡翠急降下 掛川 鈴木美由紀

○百足這ふ庭に転がる植木鉢

木下闇鴉の猛り響きけり 鈴木裕一

鶏の声張り上ぐる大暑かな 岩手 鈴木裕一

雨上がり茶園一面光立つ

掘削のショベルに止まる黒揚羽 井端久子

草引くも動かぬ鴉墓の上 金沢 井端久子

豆蒔きて蓮如の里に老いにけり

○梅を干す男ら渴の風の中 上野富貴子

○なにやかや一人の身過ぎ明易し

饅頭のあちこちより来氷室の日 ※氷室の日……7月1日金沢の伝統行事

一日の乾きうるほす夕立かな

油蟬小さき手にてさはりをり 北野陽子

蜻蛉の青や赤でもなき色よ

友とある大きな窓に雲の峰 金沢 菅原雅子

一筋の田の風入れて夏座敷 金沢 菅原雅子

声揃へ女神輿の四拍子

○初物の頭たたいて大西瓜 田上ナツ子

画架立てて青年仰ぐ青嶺かな

尾根越ゆる夏うぐひすに励まされ

夕菅に染まる高原雲湧けり 廣田宏美

山路来て手折る空木の花匂ふ

紫陽花の一朵も剪らず眺めゐる

合歓咲くや谷の廃屋みえがくれ 宮崎恵美

護摩木焚く鳳凰堂や仏桑花

青葉時雨電気治療の軽やかに

○終戦忌八十二歳の遺児ここに かほく 能任康子

コリー犬クラーの部屋独占す

紫陽花や家のそここ華やける

天地の酷暑の中を耐へに耐へ

元気でねと娘の便り鰻の日 白山 朝倉みゆき

大地震跡の家にもあいの風

葛餅のつるんと口へ孫笑顔

崩れては又湧き出づる雲の峰 白山 鶴尾正江  
御来光拝む我が影登山帽

夏蓬黙々と刈り母偲ぶ

吊橋の欄干揺れて夏帽子 敦賀 川口和代

若き日の恋文青し時計草

灯を消して月下美人の馥郁と

山法師のにごりなき色奥の院 奈良 町田すみれ

祇園会の稚児舞見入る異邦人

夏帯をきりと締めて同窓会

螢火を追ひて川辺の闇深し 徳島 林 早苗

一匹の蚊に惑はされ夜の厨

ひとり居の昼餉に庭のトマト挽ぐ

せせらぎの石にかくるる罔鮎 山本晴美

遠花火山の向かうより上がる

夏休み清き一票投票す

初蟬のはや小気味よき鳴きつぷり 山本瑤子

○空蟬のしがみつきたる古タイヤ

黄昏の庭に幾つも蟬の穴

降水帯去り一斉に蟬しぐれ 小松島 田上幸子

『戦争と平和』に挑む夏休み

ハンカチの玩具となりて子をあやす  
ぎらぎらと真昼になりぬ凌霄花 松山 入河大河

留守の間に砂糖を蟻の占有す

真夏日や声の膨らむ鳩の群れ

○甚平のままうたたねの夫の顔 福岡 園田清子

山車走る滂沱の汗の男衆

墓のみの残る故郷のつゆけしや

朝刊に気合の入る梅雨の入り 鶴田輝代

炎暑の空シルクの雲の物語

溪流の音響く宿鮎づくし 大宰府 美山留唯

峰雲や金印出でし志賀島

学生の中の五人や夜半の夏

桐の花都府楼跡の虚子の句碑 那珂川 高山ひさ子

沙羅の花やうやう消えし手術あと

灼けるたる郵便受けの回覧板

○炎天に干すお茶がらと野菜くず 門川 請関ゆかり

蟻の群れもろとも虫の骸掃く

黒南風の連れ来る雨の匂ひかな

一の宮くぐる鳥居や蟬時雨

水眼鏡子らの額に耀へり 国富 山口孝治

親子旅無口の父に注ぐ麦酒

遠花火家族絵出の影五つ

蟬時雨いつもの朝の道終はる

鬼百合や目を伏せていく人ばかり

夏服や戦記憶のジャワ更紗

指先の小さき湿りの蝸牛

足垂れて濡れ縁に聴く青時雨

木洩れ日を辿る御嶽の蟬時雨

倒木の窪に夏草長くるかな

髭剃りの朝の鏡や蟬時雨

仏桑花の蜜吸うてみな幼子に

○<sup>委楽園</sup>啞蟬や園に棲みふる人のかげ

塩田に土用の風の荒ぶれり

首里城の素屋根解体雲の峰

親を待つ子燕の目の一途かな

万緑の海辺を黒き汽車ゆけり

炎天にペテロの首や爆心地

那覇 稲嶺有晃

大城末治

高嶺容道

宜野 頭

ベルン 森尾 舞

# 俳句

11月号  
予告

10月24日発売

巻頭作品50句 星野高士  
作品21句 石寒太・山尾玉藻

予価1,300円(本体1,182円)◎

第71回

## 角川俳句賞 発表!

受賞作

千野千佳「愛嬌」50句

受賞のことば／推薦作品10句抄

選考座談会 仁平勝×対馬康子×小澤實×岸本尚毅

新連載

夏井いつき「はみ出せ! 俳句」

特別レポート

第28回俳句甲子園 黒岩徳将  
「全国高等学校俳句選手権大会」

付録

季寄せを兼ねた俳句手帖 冬・新年

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売!

電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>) など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団

発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

# 万象作品の佳句

江見悦子

青あらし万年の亀薄目開け 市川 奥澤よし江

「青嵐」(青あらし)は、青葉の頃に吹き渡るやや強い南風。石の上にいる亀は風に吹かれて甲羅を乾かしているのか、薄目を開けている。長寿の象徴である「万年の亀」というのだから、大きな亀に違いない。薄目を開けて、じっと人間世界を窺っているようでもある。見ている亀に、人間が見られている。そんな面白さがある。

オクターブ上げて鳴き止む法師蟬 金沢 松田好子

秋の気配が濃くなるころ、雄の法師蟬が鳴き始める。他の蟬と同様、交尾するために雌にアピールするのだ。蟬の中でも法師蟬の鳴き方は複雑で、鳴き始めの「ジー」から「オーシンツクツク」というメロディが繰り返され、途中で「ツクリヨシ」と変化し、「ジー」で鳴き終わるという。じつくりと法師蟬の鳴き声を聞いた作者は、最後に来て「オクターブが上がった」と感じ、句に仕立てた。鳴き止んだ後は深い静寂に支配されている。

遠き日の友の草笛まだ青く 那覇 辺野喜宝来

「まだ青く」に惹かれた。字面だけ読むと、遠い昔親しんだ友が吹いた草笛、笹の葉か、虎杖の葉か、その葉にはいまだに青色が残っている。こうなるの다가時の流れを思うとい

ささか不自然だ。心象風景としての「まだ青く」なのだろう。ふと耳にした草笛の音色から、友と過ごした思い出の時間がこぼれ出る。若かった日々が蘇り、詩情溢れる句となった。

爆心地の夜を鳴きとほす鉦叩 煥潭 小梁洋子

「爆心地」とは、原爆の落とされた広島が、長崎か。今現在爆撃を受けているウクライナかもしれない。夜通し「ちんちんちん」と鉦叩が鳴いているのは、懲りずに愚を繰り返している人間たちへの警鐘か、或いは無事の犠牲者への鎮魂の鳴き声か、戦と平和への思いを深めている作者。

おしろいや日暮の路地のかくれんぼ 横浜 岡 元枝

おしろい花の匂う路地でかくれんぼをしている子供たち、日暮になってそろそろあちこちの家から「ごはんよ」という声が掛かる頃だ。子供たちがいなくなった路地には、おしろい花の匂いが濃い。季語の「おしろい」が生き、子供時代への郷愁を誘う句となった。

ざりがにの泥より目玉覗かせり 静岡 松永博子

ざりがにの中には、清流や清浄な水域でしか生きられないざりがににもいるが、日本でよく見られるアメリカザリガニは、主に繁殖力の強さや適応能力の高さから「特定外来生物」に指定されている。この句のざりがにはアメリカザリガニではないかと思う。泥に棲み、外界を観察しているような目玉がユーモラス。俳味たっぷりな句。

灯台の受くる朝影レモン水 三鷹 高尾早弓

「朝影」は朝日の光。夜が明け、朝の光が白い灯台に差し始めた。離れたところからの眺めだろう。作者の手には「レ



モン水」。レモンスカッシュのこと、爽快感あふれる。旅の朝なのか、晴れ晴れとした気分の良い句である。

棘生き生き籬いつばいの初茄子 新庄 曾野部礼子

「棘生き生き」と上五から始まるこの句、収穫の喜びに溢れている。「籬いつばいの初茄子」とあり、茄子は作者の大好物なのかもしれない。専にある棘までもいとおしいのだ。実感から素直に生まれた即物具象の句。

紅薔薇や食堂隅の授乳室 栃木 飯塚キミ

この句の場面は職場の情景ではないか。乳飲み子を抱えた母親が仕事場で子に乳をやれるとは、配慮の行き届いた職場だと思う。季語の紅薔薇がふさわしい。三字熟語を3つ並べた客観写生の句に、作者の眼差しのあたたかさを感じる。

電柱の影の短き炎暑かな 柏 村田由美子

炎暑の昼、人影の絶えた道には電信柱が濃い影を落としているばかり。南中時にはその影が短くなることに気づき、そのままを素直に詠んでいる。かな止めのきっちりとした句。

夏座敷生徒の白き膝小僧 四布 荒井 仁

夏休みの近づいた頃、広い夏座敷に正座して講義を受けている女生徒たち。制服のスカート姿の白い膝小僧が並んでいる。生徒たちの若さを眩しく感じた作者は、これからの長い休みを無事に過ごして欲しいと祈っているのか。「白き膝小僧」が一句を成り立たせている。

夜濯やをんな一人のランドリー 葛田 松井宣夫

夏の日中汗で汚れた衣類を、涼しい夜になってから洗うことが季語「夜濯」。「ランドリー」はコイン・ランドリーの略。

一人夜遅いランドリーにいる女をみて、あれっと思った作者のちよつとした驚きを詠んだ句だが、ドラマの一場面のようにもあり、様々な想像が広がる面白い句になった。

顔ぶれの揃ふ体操秋立つ日 静岡 杉山千鶴子

暦の上では今日から秋という朝、いつもの公園でラジオ体操が始まった。昨日までは一人二人と欠席者がいたが、今朝はいつもの顔ぶれが揃った。これから残暑が続くが、新しい季節を迎えて、作者は気持を新たにしている。

梅を干す男ら渴の風の中 金沢 井端久子

遠浅の海辺近く、男たちが赤紫蘇で赤くなった沢山の梅を大箆に並べている。これから晴れの三日間、汐を含んだ渴の風に干し上げるのだ。毎年繰り返す素朴な作業だが、厳しい労働である。沢木欣一先生の「能登塩田」の句を思った。

空蟬のしがみつきたる古タイヤ 徳島 山本瑤子

脱皮を終えた蟬の抜け殻をあちこちで見かけるが、何と古タイヤにしがみついている空蟬を見つけた。哀れさと同時に蟬の生命力の強さに驚いている作者。

啞蟬や園に棲みふる人のかげ 富山 宜野 顕

季語「啞蟬」は、鳴く事のない雌の蟬を指す。古い家々が並んだ園の植込みを透かして人影が見える。「園」とあるのは、療養施設のようなところか。静かな穏やかな生活が想像されるが、作者の目に映ったのは啞蟬。世間とは隔絶された世界を象徴しているかのような「啞蟬」が動かない。

# 新中央句会報(8月例会)

令和7年8月31日(日) 大妻女子大学

(出席19名)

江見 悦子 主宰選

炎天下じやぶじやぶ池におむつの子  
終戦日子は提灯をかがけしと  
みんなの一声終に百と和し  
おにぎりを大きく結ぶ終戦日  
盆の客株の話をしてゆけり  
赤らめる稲穂啄む土鳩かな  
秋暑し足場解かるる鉄の音  
直売のU字L字の胡瓜かな  
四五杓の水墓の辺の野菊にも  
夏果の海より韓<sup>か</sup>の人の骨  
① 炊き立ての飯と焼き立てしやけあらば  
安藤美酒々

小池 清晴  
桔 梗 純  
長谷川 信也  
下 嶽 孝 一  
榎 本文代  
塗 木 翠 雲  
榎 本文代  
小 池 清 晴  
三 屋 英 俊  
中 村 千 久  
安藤美酒々

② 炊き立ての飯と焼き立てしやけあらば 安藤美酒々

「あらば」は、ラ変動詞の未然形「あら」+接続助詞「ば」  
の仮定条件の形で、「何々するならば」の意味を持つ。この  
句の後には「満足だ、申し分がない」等の思いが続くことが  
想像できる。「鮭」は秋になると生まれた川に戻って産卵す

ることから秋の季語。もちろん、冷凍の鮭の切り身をいつで  
も食することの出来る時代だが、今のこの季節初物の鮭が出  
回っていることもあり、季語と取りたい。「炊きたて」「焼き  
たて」のリフレインと省略が効いている。「しゃけ」の発音  
は筆者にとっても懐かしい東京弁である。

みんなの一声終に百と和し 長谷川 信也  
なるほど、「みんな」の鳴き声はこういうものか。暑さ  
の中で突然鳴き始め、次第に音が大きくなって終には耳を聳  
せんばかり、百匹の声と一緒にあってふくらんでいく。「百  
と和し」の措辞が、みんなの有りに迫っている。

盆の客株の話をしてゆけり 榎 本文代  
盆は、先祖の魂まつりを行う年中行事。お参りに来た客か  
らひとしきり株の話が出た。ふっと違和感を感じた作者だが、  
俗世を生きる人間の本音の話なのだ。平明な表現でありなが  
ら、生きることの哀しみに触れた、アイロニーたっぷりな俳  
味のある句となっている。

夏果の海より韓<sup>かん</sup>の人の骨 中村 千久

長生炭鉱は、戦時中盛んに採炭していた山口県宇部市にあつ  
た海底炭鉱。昭和17年に水没事故が起き、2000人近い鉱員が  
亡くなったが、多くが朝鮮半島から来た人々だった。最近の調  
査で、見つかった遺骨が韓国の鉱員のものであったことが判明し  
た。つらくむごい話を一句に仕立てた、社会性のある句。

中村 千久 選

新涼や風呂場のタイル洗ひ上げ 江見悦子

夕焼のなごり波頭に親不知 砂地宏子

ダンボールどんと唐黍十二本 安藤美酒々

母十六たつた一人の敗戦日 砂地宏子

竹竿の腕に軍手の案山子かな 小池清晴

川風を光らせ群るるあきつかな 加賀葉子

南極の水グラスに月祀る 一由久美子

秋暑し足場解かるる鉄の音 榎本文代

しなふ手は寄する白波島をどり 三屋英俊

四五杓の水墓の辺の野菊にも 三屋英俊

④ 少年の宇宙広がる甲虫 松井宣夫

⑤ 少年の宇宙広がる甲虫 松井宣夫

⑥ 少年の宇宙広がる甲虫 松井宣夫

出来るだけ土に触れ自然と親しむことによつて子供の前頭

葉を発達させることが望ましいそうだ。そうして発達するも

のを、作者は「少年の宇宙」と表現しているのではないだろ

うか。季語に納得がゆく。

川風を光らせ群るるあきつかな 加賀葉子

秋の訪れとともに川原に湧くように現われる赤蜻蛉を詠ん

だ一句である。よく目にもし、句にも詠まれる情景だが、掲

句の「川風を光らせ」がいいなあ。赤蜻蛉の群れに揺られる

秋風を美しく輝かせて見せた。

四五杓の水墓の辺の野菊にも 三屋英俊

墓参に出かけた作者。花筒に供花を挿し、丁寧に墓石を洗

ったのだ。さてそこで桶に残った「四五杓の」というほどの

僅かな水である。これを捨てずに、辺りに咲き始めた「野菊

にも」掛けてやったと。これが俳句をする人の心映えである。

句またがりの一句。

榎本 文代 選

新涼や風呂場のタイル洗ひ上げ 江見悦子

迷ひ来てさてと道なり木槿垣 大久保 進

川筋を辿れば秋の夜風かな 久留島規子

柿色の竹の柄長き秋日傘 中村千久

盆三日良太百句を口遊ぶ 塗木翠雲

おしやべりの弾みて風の猫じやらし 一由久美子

万屋へ子の駄けゆける青田風 砂地宏子

夏惜しむ浮雲青に溶けゆけり 三屋英俊

しなふ手は寄する白波島をどり 三屋英俊

あさがほにむらさきの風かすかなり 一由久美子

⑦ 炊き立ての飯と焼き立てしやけあらば 安藤美酒々

④ 炊き立ての飯と焼き立てしやけあらば 安藤美酒々

この句の後に言葉が続けるならば、「あとは何もなくても十分にこ馳走です」か。また「鮭」でなく「しやけ」として好物へのこだわりを伝えている。ただ、秋の季語としての「鮭」は週上する鮭で、食卓に上る鮭ではないようだ。「秋刀魚」は季語なのと思った。

新涼や風呂場のタイル洗ひ上げ 江見悦子

「新涼」は秋になってから立つ季節の涼しさである。猛暑の夏はシャワーで済ませていても、さやかな風が吹くとゆっくり浴槽に浸かりたくなる。「タイル洗ひ上げ」には初秋のすつきりした季節感が感じられる。

万屋へ子の駄けゆける 青田風 砂地宏子

都会では見ることの出来なくなった万屋さん。店では日用雑貨品の中にビー玉、メンコ、おはじきなどの玩具も売られていて、子供たちには楽しい場所があった。句の懐かしさを「青田風」のすがすがしい季語が受け止めている。

今後の新中央句会の予定

▽11月23日(日) 東京文化会館 中会議室 13時より

▽12月の新中央句会は、会場の確保が出来ないため

中止と致します。

※特集

## 俳句と インターネット

「巨大」細村星一郎

「詩歌梁山泊」森川雅美

「週刊俳句」西原天気

「セクトボクリット」堀切克洋

「俳句新空間」筑紫磐井

「AKANTA」カルフル

「ハニカム」メグルク

「RUBY」よんもじ

※巻頭三句

橋本榮治／名村早智子

日下野由季／朝妻力

大橋一弘／安田のぶ子

※今月の華

田口風子／称宜田潤市

※俳句と短歌の10作比較

池田瑠那／後藤由紀恵

※人と作品

山岸竜治句集

『君はポップな日本の詩』

特別作品40句

長谷川權

※好評連載

成瀬政博

とりあえずの日々

筑紫磐井

俳壇風情

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句

青木亮人

句の手ぬり、

俳人の書き

大西朋

俳句へのまなざし

井上泰至

俳句の語彙

イメージ辞典

橋本喜夫

俳句のレトリック

神作研一

てのひらの江戸

——古典箱を旅する

藤村公洋

俳句のつまみ

堀田季何

諸家音楽

石井隆司

たもとほる

俳句よもやま話

二ノ宮一雄

俳句四季  
Haiku Shiki

2025年11月号

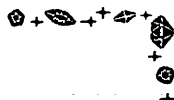
10月20日発売  
定価1100円(税込)

<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180



## ルビーの小函 (11月号)



「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- 8 徒長枝 (とちようし)  
卮 (かさ)
- 11 蟠り (わだかまり)  
玉蜀黍 (とうもろこし)
- 12 燕子花 (かきつばた)  
漁火 (いさりび)
- 14 見聲かす (みはるかす)  
田の面 (たのめ)
- 15 網代天井 (あじろてんじょう)  
野州 (やしゅう)
- 16 冷まじ (すさまじ)  
燠さる (いぶさる)  
羅 (うすもの)
- 17 襖 (つま)  
暮れ泥む (くれなずむ)  
小波 (さざなみ)  
勢ひ (きおい)  
睥睨 (へいげい)
- 18 踵 (かかと)  
仕舞屋 (しもたや)
- 19 斎の夜 (ときよ)  
疎ら (まばら)
- 20 手庇 (てびさし)  
如己堂 (によこどう)
- 21 跣足 (はだし)
- 22 蕩け出す (とろけだす)  
疾風 (はやて)
- 23 樵 (きこり)
- 24 紅型 (びんがた)  
真緒 (まそお)
- 26 鉄漿蛸蛉 (おはぐろとんぼ)  
秀 (ほ)

- 27 益荒男 (ますらお)  
病葉 (わくらば)  
三和土 (たたき)  
上がり框 (あがりがまち)
- 28 背 (せな)  
莊嚴華 (しょうごんか)
- 32 稲渾火 (いなしび)  
帳 (とばり)  
爽籟 (そうらい)
- 33 勝角力 (かちずもう)  
海鼠 (なまこ)
- 37 噺る (しわがる)  
篁 (たかむら)
- 51 獭 (ばく)
- 53 添水 (そうず)  
無花果 (いちじく)  
御冷 (おひや)
- 54 宿木 (やどりぎ)  
桴 (ばち)  
四阿 (あずまや)  
海霧 (じり)  
糶場 (せりば)
- 55 忙しなき (せわしなき)
- 57 葎 (むぐら)  
安曇野 (あずみの)
- 58 花山葵 (はなわさび)  
認む (したたむ)
- 59 蠢ける (うごめける)  
空木の花 (うつぎのはな)
- 61 麦酒 (ビール)

9月号訂正 44 緑苔→翠苔 (すいたい)

# 北 南 西 東

## 消 息 等

江見悦子主宰の句、「くちら」9月号に

滝音のたがへり水分石を越え 悦子

「初蝶」9月号に

もてなしや綾子の軸とさくら餅 悦子

「たかんな」8月号・9月号に

山の端に触るる黒雲春遅遅と 悦子

芽木の風文学館へ橋わたる 悦子

「山蘭」8月号・9月号に

もてなしや綾子の軸とさくら餅 悦子

矢車菊ま青フアラオの棺の上 悦子

第十回いわき海の俳句全国大会の結果報告

万象の皆さんの応募の句、好成績でした。

福島復興支援として始まった大会も10回

を数え、今回で終了が決まりました。来年

は、「海の俳句全国大会」の名称を沖縄が

引き継ぐ予定です。変わらぬ協力をいたし

ましょう。

事前投句 海に関する俳句 入選句

伊藤伊那雄 選

神前に贅の鯨吊り神楽舞 中條睦子

江井 芳郎 選

遠伊豆の端まで見えて白子干す 藤原千代子

八雲の海祭囃子に波踊る 小梁洋子

海は夏帰らざる子のランドセル 辺野喜宝来

坂西 敦子 選

遠伊豆の端まで見えて白子干す 藤原千代子

秋草の起伏に触るる海の風 荻野加壽子

高田 正子 選

夕風や沈む日待つ露天風呂 亀田やす子

海晴れて山晴れて街つらけし 神田美穂子

朝焼に開かれてゆく波の音 穂刈照子

事前投句 自由句 高田正子特選

仏壇を大きく開き武具飾る 成瀬真紀子

事前投句 自由句 入選句

伊藤伊那雄 選

三陸へ幸吹き寄せよ春疾風 桔梗 純

クレヨンの二十四色春日影 松下信子

あぢさゐの色の満ちゆく重さかな 穂刈照子

江井 芳郎 選

ささむほど山の香放つ露のたう 伊藤美音子

畔塗りの一鍬つづや千枚田 井端久子

人間の匂ふ遺品や原爆忌 荻野加壽子

坂西 敦子 選

麦秋や農免道路に揚物屋 亀田やす子

坂本 宮尾 選

西瓜食べ五臓六腑の鮮しき 神田美穂子

高田 正子 選

人間の匂ふ遺品や原爆忌 荻野加壽子

田植機の吐きだす苗に細波す 河野尚子

当日句 入選句

高松 公久 選

防災の松高々と新松子 成瀬真紀子

〔各種全国俳句大会のお知らせ〕

第1回 真砂女俳句大賞 作品募集

投句料 二千元 (二句一組)

投句締切 令和7年12月1日

石田波郷記念「はこべら」俳句大会

投句料 千円 (二句一組)

投句締切 12月10日

「波郷を偲ぶ句」または兼題「川」より

一句と四季雑詠一句

詳しくは「砂町文化センター」ホームページ参照

ジ参照

虚子・こもろ全国俳句大会 作品募集

投句料 四句一組二千元

(二句一組千円でも可) 雑詠

投句締切 11月21日

(報・編集部)

令和7年度 「万象」全国俳句大会 作品集

## ご挨拶

令和7年度「万象」全国俳句大会の応募作品658句が、全国から寄せられました。応募されたすべての俳句を作品集としてお届けします。

特選句については、選評が付されています。同人・会員を問わず、沢山の句の中で自分の句を見直してみる、絶好の機会です。どうぞゆつくりと鑑賞し、句会等でも話し合ってください。

なお、投句作品には新作をお寄せください。毎月の「万象」誌への投句は勿論のこと、大きな句会に出したそのままの作品は避けたいものです。「いま、ここ、われ」を詠んだものを期待しています。

受付、校正、選者や印刷所とのやり取り等、全般に亘って、東京支部の皆さんに受け持って頂きましたこと、深く感謝申し上げます。

毎月、「万象」誌上でお会いできることを楽しみにしております。皆様の一層のご健吟を祈ります。

令和7年11月1日

万象俳句会主宰 江見悦子

## 大会作品集 目次

ご挨拶	江見悦子	2
江見悦子 主宰	選	3
小林愛子 名譽顧問	選	4
中村千久 編集長	選	5
中條睦子 同人会長	選	6
福島せいぎ	顧問	6
柳澤宗正	顧問	7
林陽子	選	7
亀田やす子	選	8
沢辺たけし	選	8
下嶽孝一	選	9
榎本文代	選	9
神田美穂子	選	10
前田貴美子	選	10
作品集	.....	12
御礼とご挨拶	中村千久	29



## 江見悦子主宰選

- 22 もう開かぬ父の棺に夏帽子 東京 一由久美子  
 99 踏み入りて見ゆる道あり草いきれ 佐倉 鈴木隆久  
 180 生薔を罌りし記憶敗戦忌 静岡 大長文昭  
 207 退院の身ぬち鎮もる月今宵 千葉 大月玲子  
 219 鯛の樹より暮色の広がりぬ 東京 中澤桃子  
 247 太宰忌や鞆の底の煙草屑 那覇 前田貴美子  
 251 捺印に死がととのうてゆく晩夏 射水 成瀬真紀子  
 253 手提げより水やら飴やら団扇やら 射水 成瀬真紀子  
 266 降灰に閉ちたる部屋の暑さかな 宮崎 中山 宣  
 339 一杯の水有り難き原爆忌 静岡 田中秀幸  
 345 もう米を作らぬ田圃向日葵千 加須 茂木弘子  
 355 赤とんぼ南蛮通詞の大木戸門 長崎 丸本祥夫  
 377 闘争の記憶の砂丘風死せり 金沢 松田好子  
 395 縁に座すひとりの句座や百日紅 益子 光岡れい子  
 457 大花野空わかちあひ風と鳥 金沢 伊藤美音子  
 462 稲車真間の継ぎ橋通りけり 東京 名和政代  
 467 度忘れを思ひ出したり砂糖水 静岡 加山ひさ子  
 488 終戦日ラバウルからのハガキ読む 佐野 仲山さよ子  
 508 ブロッコリーの拳骨五つ無人店 静岡 石川裕子  
 516 うかり出て老いに打たる油虫 佐倉 大内佐奈枝  
 523 かなぶんぶん生きて潜れる棕櫚箒 横浜 小林愛子

- 539 命名の筆買ひに出づ秋日和 東京 下嶽孝一  
 566 秋扇月の一字を疊みけり 横浜 榎本文代  
 594 帰る靴遅れ来し靴孟蘭盆会 燕 渡辺志ま  
 606 陶枕の青き山水閨の闇 金沢 杉本年虹  
 638 飲み止しのグラスがふたつ星涼し 日野 喜多尾明子  
 649 長城の土塊となり女郎花 町田 広瀬俊雄

## 【特選句】

- 276 刃物屋の取説英語夜店の灯 静岡 小川明美  
 評 縁日の夜、開いた刃物屋に英語の取扱説明書を見つけた作者。夜店の灯に照らされて銀色に光る大小様々な刃物が並び、店先には異国の人々も。名詞を重ねた即物具象の句。句材が新しく焦点が決まった。

- 571 算数を知ったかぶりのかき氷 那覇 稲嶺有晃  
 評 小学生の子供と算数の話になった。鶴亀算などを説明しようとするが、なかなか難しい。わかったような顔で説明しているところに、ちよどこかき氷が運ばれて来てほっと一息。「知ったかぶり」が俳味たつぷり。

- 628 純子忌や消えなんととして濃き夕焼 金沢 中條睦子  
 評 中山純子先生の忌日は7月28日。亡くなられて11年、金沢では毎年「中山純子忌」を修している。その日の夕方、消える寸前の夕焼が濃かったという。師への思いの深さ、渡されたものの大きさを心に期している。

# 小林愛子名譽顧問選

26 火の色の雨のしたたり曼珠沙華 静岡 荻野加壽子  
 57 丸洗ひされて汗疹の赤ん坊 金沢南 恵子  
 83 夕風や白粉花は墓地に咲く 横浜 星野信子  
 89 語り部のまづ水を飲む大暑かな 徳島 福島せいぎ  
 149 朝顔と鬼灯市は昔から 東京 大場八朗  
 169 退屈な日の単純な扇風機 流山 穂苅照子  
 192 飛込台後退りの子入道雲 敦賀 為永香月枝  
 212 船宿の裏は南瓜の花盛り 酒々井 竹澤竹里  
 215 父の死後父と向き合ふ敗戦忌 東京 小池清晴  
 227 広島忌原爆ドーム鏑深き 鎌倉 恒川清爾  
 247 太宰忌や鞆の底の煙草屑 那覇 前田貴美子  
 253 手提げより水やら飴やら団扇やら 射水 成瀬真紀子  
 270 引鴨の富士川越えて列揃ふ 静岡 藤原千代子  
 305 炎天や地蔵に願ふぴんころり 柏 山本とく江  
 309 擦れ違ふ華奢な女のサングラス 徳島 山本瑤子  
 313 花街の空家物件夾竹桃 那覇 高嶺容道  
 321 熱帯夜五臓六腑に朝の粥 茅ヶ崎 久保田章十子  
 353 裏口は海へ石段雁渡し 長崎 丸本祥夫  
 377 闘争の記憶の砂丘風死せり 金沢 松田好子  
 462 稲車真間の継ぎ橋通りけり 東京 名和政代  
 535 暑き日にニューオリンズのジャズ恋し 札幌 土門 一

539 命名の筆買ひに出づ 秋日和 東京 下嶽孝一  
 556 祭り笛遠し病衣をゆるやかに 札幌 岡本敬子  
 594 帰る靴遅れ来し靴孟蘭盆会 燕 渡辺志ま  
 608 星 空へ響く一管 薪能 金沢 北川禮子  
 628 純子忌や消えなんとして濃き夕焼 金沢 中條睦子  
 651 緑蔭に影沈ませてねむる犬 東京 桑原優美子

## 【特選句】

489 村祭昭和に生きて小津映画 船橋 中嶋久登  
 評 村祭には、小津安二郎の映画が掛った。小津は第二次大戦後に「晩春」「東京物語」などで独自の映画美を追求。作者は改めて「昭和に生きて」来たことを痛感した。戦争と繁栄、次なる潮流に揉まれた時代であった。

586 灯の雫星のしづくや橋涼み 金沢 豊田高子  
 評 夏の暑さを逃れて屋外や水辺で涼をとるのが「納涼」である。橋の上に立てば兩岸の灯が煌めき、見上げれば降る星の光り。「枕の草子」ならずとも「夏は、夜。」である。酷暑続きで様子が変わらなければ良いが。

604 甲ひは初蛸の高音かな 金沢 杉本年虹  
 評 この甲ひは近しい人なのであろう。今まさに野辺送りを、というときに初蛸である。蛸は森の奥の方で鳴く、小さい体から生まれる金鈴は「高音」となって甲ひの場に届いたのである。その声は哀悼に満ち、莊嚴ですらあった。

# 中村千久編集長選

- 22 もう開かぬ父の棺に夏帽子 東京 一由久美子  
 24 片耳の欠けし仏頭秋の声 東京 一由久美子  
 28 蚕豆に沈黙の口沖縄忌 静岡 荻野加壽子  
 52 看護師の引つ詰め髪の涼気かな 伊勢原 佐藤和子  
 57 丸洗ひされて汗疹の赤ん坊 金沢 南 恵子  
 88 雪溪の残る月山空広し 大江 安藤桂花  
 95 ふくよかな志功の媛や桃太る 佐倉 三屋英俊  
 102 箒目の跡に風音桐一葉 佐倉 鈴木隆久  
 114 曾良の忌や古刹の僧の萌黄色 敦賀 中川雅月  
 116 口すばめ乳吸ふ夢か昼寝の子 札幌 松原智津子  
 127 沼晴れて蜻蛉浄土となりにけり 富士 神田美穂子  
 135 島の子の裸で遊ぶ手漕ぎ舟 徳島 福島吉美  
 168 蔓の先色なき風を探しをり 流山 穂刈照子  
 183 小判草人の気付かぬ風ひろふ 静岡 本多ひとみ  
 310 大夕焼焔の生まるる海峡に 徳島 山本瑤子  
 353 裏口は海へ石段雁渡し 長崎 丸本祥夫  
 363 甘味屋の京の座敷の葎障子 敦賀 倉谷ます美  
 445 尻一つ空けて妻呼ぶ端居かな 川崎 大久保進  
 460 鵲の声止みて暮色の俄なり 金沢 伊藤美音子  
 510 夜桜や実果てたる闇の色 武蔵野 砂地宏子  
 518 オルガンのミサ曲流る浦上忌 四街道 塗木翠雲

- 540 白壁に映ゆる会津の柿すだれ 東京 下嶽孝一  
 542 秋冷や運河にゆらぐ小櫓の灯 東京 下嶽孝一  
 563 裏木戸の閉ざされ烏瓜の花 横浜 榎本文代  
 575 みんなの被爆せし木を鳴きつづく 酒々井 小林あけみ  
 584 万緑や竿いっばいに産着干す 金沢 豊田高子  
 609 水匂ふ闇に螢の金の糸 金沢 北川禮子

## 【特選句】

- 73 ソーダ水去年と違ふ髪の色 七尾 谷渡末枝  
 評「ソーダ水」という季語から、掲句が詠んだのは若い女性とみた。今年の夏の彼女の髪の色が去年と違う。社会人になったのか、恋でもしたのか破れたのか。あれこれ想像させてくれた一句である。

- 319 高原の夏の大三角形近し 佐野 店網洋子  
 評 こと座のベガ、わし座のアルタイル、はくちよう座のデネブ。夏の夜空に輝く一等星である。初めて北斗七星を目にしたとき、その大きさに驚いたが、高原で見た夏の星を「近し」としたのが実感だろう。

- 539 命名の筆買ひに出づ秋日和 東京 下嶽孝一  
 評 お孫さんが生まれたのだらう。その名づけを頼まれた作者、既に名前を決めて、お七夜に備えて奉書紙にそれを認めようというのである。真白い穂の新しい筆を買いに出たのだ。季語の「秋日和」が実に明るく、幸福感に満ちている。

## 中條睦子同人会会長選

- 28 蚕豆に沈黙の口沖繩忌 静岡 荻野加壽子  
 56 道祖神涼風の顔寄せ合へり 静岡 望月敏男  
 60 古書街やいつせいに鳴る江戸風鈴 金沢 南 恵子  
 93 白桃を挽ぐ一灯を消すごとく 佐野 加藤季代  
 157 噴き上ぐる泉は富士の吐息かな 静岡 中澤祐一  
 237 今日の汗遣ひきつたる野良仕舞 静岡 杉澤 修  
 254 尺蠖に何の逡巡立ち上がる 射水 成瀬真紀子  
 401 十一時二分の鐘や原爆忌 東京 江見悦子  
 448 煙突の消えし町並み月渡る 川崎 大久保 進  
 507 あね素直いもうと勝気花菜風 静岡 石川裕子  
 531 万緑の谷に赤錆ぶ高千穂線 柏 内田郁代  
 568 新盆の良太師迎へむ UFOで 東京 安藤美酒々  
 594 帰る靴遅れ来し靴盃蘭盆会 燕 渡辺志ま  
 637 日盛や死にゆく鳥はまなこ開け 日野 喜多尾明子  
 特 251 捺印に死がととのうてゆく晩夏 射水 成瀬真紀子

評 お身内の大切な人の死。死亡届などまずは提出する書類に捺印をする。悲しみの中の現実を受け止めなければならぬ瞬間である。「晩夏」の季語がしっかりと一句を受け止めている。

## 福島せいぎ顧問選

- 50 大仏の背中を流す緑雨かな 伊勢原 佐藤和子  
 88 雪溪の残る月山空広し 大江 安藤桂花  
 140 山の子の海の子となる夏休み 徳島 村上和義  
 212 船宿の裏は南瓜の花盛り 酒々井 竹澤竹里  
 213 青竹に打ち水をして辻廻し 酒々井 竹澤竹里  
 214 月鉾へコンチキチンと兎跳ね 酒々井 竹澤竹里  
 219 鯛の樹より暮色の広がりぬ 東京 中澤桃子  
 249 遠雷や海は明るきまま暮れて 那覇 前田貴美子  
 368 背表紙の揃ふ本棚涼新た 金沢 清水英理子  
 411 まつさらの天鵝絨めける夏の山 三鷹 植村康子  
 451 幼き日泳ぎし海へ帰省せり 千葉 喜多恭仁子  
 460 鶴の声止みて暮色の俄なり 金沢 伊藤美音子  
 564 雲の峰鉄が鉄打つ音ひびく 横浜 榎本文代  
 644 向日葵の小花を浮かべ花手水 横浜 大橋雅子  
 特 405 盆提灯ともせば母の部屋になり 東京 藤田裕子

評 新盆を迎えた母への思いがせつせつと伝わってくる。亡き母が使っていた部屋に盆供養の用意をする。盆提灯を灯すと、そこに母がいるような思いがする。母への思いはいつまでも尽きることがない。

## 柳澤宗正顧問選

- 22 もう開かぬ父の棺に夏帽子 東京 一由久美子  
 36 一村を山へ押しやり青田波 教賀 鶴田勝子  
 54 七夕や「せかいへいわ」と幼の字 静岡 望月敏男  
 92 炎天へ心を先に踏み出せり 佐野 加藤季代  
 109 子の背丈気づきし朝夏に入る 柏 鹿毛満子  
 255 海霧を来て確と国後島見ゆる丘 札幌 林 陽子  
 333 青梅を挽ぎにおいでと二軒先 横浜 大駒泰子  
 408 墓守は吾のみとなりぬ草の花 東京 藤田裕子  
 446 庭下駄の指の窪みや草の露 川崎 大久保 進  
 488 終戦日ラバウルからのハガキ読む 佐野 仲山さよ子  
 514 道ゆづる山のあいさつ遠郭公 佐倉 大内佐奈枝  
 526 のびやかな牛の一声雲の峰 柏 古川京子  
 593 十代はもつと食べよと生身魂 燕 渡辺志ま  
 631 短冊の師の文字涼し寺座敷 金沢 高田たみ子  
 377 闘争の記憶の砂丘風死せり 金沢 松田好子

評 この句は内灘砂丘を舞台に展開された戦後最初の基地反対闘争を回顧したものと解する。朝鮮戦争を背景に米軍の砲弾試験場になったが、今は海水浴場になっているようだ。土用風の息苦しい暑さの砂丘に立って、往時を追想。

## 林 陽子選

- 90 石庭にあそぶ寺の子裸の子 徳島 福島せいぎ  
 95 ふくよかな志功の媛や桃太る 佐倉 三屋英俊  
 126 御師の宿廃れしままや花八つ手 横浜 柳澤宗正  
 192 飛込台後退りの子入道雲 教賀 為永香月枝  
 246 きかんばうの子は母となり天瓜粉 徳島 宮西修一  
 285 貝塚の縁に摘みたる三葉芹 札幌 落合裕子  
 339 一杯の水有り難き原爆忌 静岡 田中秀幸  
 368 背表紙の揃ふ本棚涼新た 金沢 清水英理子  
 394 飛び石を五つ厠へ蚊遣香 益子 光岡れい子  
 438 帯皺の上布の掛かる仏の間 町田 吉中愛子  
 526 のびやかな牛の一声雲の峰 柏 古川京子  
 558 コロボックル居さうな暗さ螺 札幌 岡本敬子  
 578 終戦日ガラスのうさぎ知らぬ子 酒々井 小林あけみ  
 607 火渡りの足裏を洗ふ清水かな 金沢 北川禮子  
 446 庭下駄の指の窪みや草の露 川崎 大久保 進

評 縁側の踏み石（下駄脱ぎ、沓脱石とも）に揃えて置かれた庭下駄。大切に長く履かれたのであろう。愛着のある下駄の台に確りと残る指の跡（指の窪み）に父を思う。「草の露」が読み手の想像を駆り立てる。

## 亀田やす子 選

- 81 鉦のあと円空仏の笑み涼し 横浜 星野信子  
 160 朝焼を纏ふ尖峰利尻富士 札幌 中鉢弘一  
 205 鮎の川八溝山地を横切れり 佐野 芝宮留美子  
 222 踊の輪浴衣に交じるスーツかな 東京 中澤桃子  
 304 句会果つフロントガラスに虹の橋 栃木 上岡佳子  
 309 擦れ違ふ華奢な女のサン格拉斯 徳島 山本瑤子  
 319 高原の夏の大三角形近し 佐野 店網洋子  
 346 坂東太郎酷暑の街を蛇行せる 加須 茂木弘子  
 428 読みみかせの本を小脇に夏帽子 佐野 義本美智江  
 474 夏休みじゅげむじゅげむと唱へる子 船橋 久保村淑子  
 488 終戦日ラバウルからのハガキ読む 佐野 仲山さよ子  
 522 縁側に脚をぶらぶら麦こがし 横浜 小林愛子  
 608 星空へ響く一管薪能 金沢 北川禮子  
 647 始皇帝の墓をめぐれり 花町 田広瀬俊雄  
 107 レジを打つ九十歳の春帽子 柏 鹿毛満子

評 現役で店番をしている九十歳。冬を越えトレードマークの帽子を春物に替えた。相も変わらず見せに立ち客との会話を楽しんでる姿を想像した。高齢者は指を動かしてレジを打つことも健康で長生きの秘訣である。

## 沢辺たけし 選

- 17 生身魂三途の川の釣りが夢 宇都宮 阿久津勝利  
 46 はんなりと苦言の乗りし団扇風 さいたま 山本右近  
 50 大仏の背中を流す緑雨かな 伊勢原 佐藤和子  
 93 白桃を挽ぐ一灯を消すごとく 佐野 加藤季代  
 110 棧橋の柳押しやり舟を出す 柏 鹿毛満子  
 175 野萱草水面に雲を走らせて 伊勢原 山本カツ子  
 221 新聞紙の袋膨らむ葡萄かな 東京 中澤桃子  
 247 太宰忌や鞆の底の煙草屑 那覇 前田貴美子  
 251 捺印に死がととのうてゆく晩夏 射水 成瀬真紀子  
 254 尺蠖に何の逡巡立ち上がる 射水 成瀬真紀子  
 405 盆提灯ともせば母の部屋になり 東京 藤田裕子  
 446 庭下駄の指の窪みや草の露 川崎 大久保進  
 558 コロボックル居さうな暗さ 螺湾路 ちわん 札幌 岡本敬子  
 601 路地の菊きりと括る暮しかな 立川 正田華子  
 449 長崎忌最後の被爆地で有れかし 千葉 喜多恭仁子

評 唯一の被爆国である日本。広島は昭和二十年の八月六日、長崎は八月九日に原爆は投下された。こういう悲劇は二度と繰り返されたくない。この句は日本人の、いや全世界の人々が持っている思いを詠んでいる。

## 下嶽孝一選

- 10 汗滲む名医の腕に余生受く 敦賀 川口和代  
 31 田植終ゆ能登の白米千枚田 千葉 松浦陵保  
 49 飴色となりし籐椅子姉白寿 伊勢原 佐藤和子  
 54 七夕や「せかいへいわ」と幼の字 静岡 望月敏男  
 103 身にしむやこれほど小さくなりし母 佐倉 鈴木美根子  
 107 レジを打つ九十歳の春帽子 柏 鹿毛満子  
 116 口すばめ乳吸ふ夢か昼寝の子 札幌 松原智津子  
 159 夏草や今穂やかにチャシの跡 札幌 中鉢弘一  
 179 新築の家に先祖の魂迎へ 静岡 大長文昭  
 215 父の死後父と向き合ふ敗戦忌 東京 小池清晴  
 237 今日の汗遣ひきつたる野良仕舞 静岡 杉澤 修  
 369 異国語の短冊も入り星祭 金沢 清水英理子  
 450 ハイビスカス涙の涸れぬ八十年 千葉 喜多恭仁子  
 464 那谷寺へひと筋の道草紅葉 東京 名和政代  
 255 海霧を来て確と国後島見ゆる丘 札幌 林 陽子

評 北海道沿岸・太平洋側の暖流と親潮寒流の交錯に寄り海霧「じり」が発生する。作者は冬期間は通行止めとなる知床峠展望所から、くつきりと現在ロシアが実効支配する北方領土・国後島を見る事が出来て喜んでおられる。

## 榎本文代選

- 97 裾の波おけさ踊ればし吹きけり 佐倉 三屋英俊  
 102 箒目の跡に風音桐一葉 佐倉 鈴木隆久  
 136 封筒で届く寄進の今年米 徳島 福島吉美  
 219 蜩の樹より暮色の広がりぬ 東京 中澤桃子  
 223 吾亦紅辞める話のまた一人 東京 高野翠子  
 244 心太昭和平成令和生く 徳島 宮西修一  
 268 溝浚へ角を曲がりて終ひとす 静岡 藤原千代子  
 324 阿壇の実慰霊の道に踏みしだく 長野 宜野 顕  
 380 石灰山に染み入る祇園囃子かな 佐野 亮野 緑  
 388 ひろしまや朝蟬の声滾らせて 焼津 小梁洋子  
 526 のびやかな牛の一声雲の峰 柏 古川京子  
 534 パナマ帽被りし写真セピア色 札幌 土門 一  
 584 万緑や竿いつばいに産着干す 金沢 豊田高子  
 630 本棚の林中にゐて秋隣 金沢 中條睦子  
 248 蜘蛛掃いて酒場灯せる薄暮かな 那覇 前田貴美子

評 猛暑が続き、室内で蜘蛛を見ることが多かった。冷房で居心地がよかったのかもしれない。「蜘蛛を掃く」に実感がある。酒場の灯など情感のある言葉に句が流されないのは、季語の働きが大きいからだと思う。

## 神田美穂子選

- 51 雨後といふ閑かな時間秋海棠 伊勢原 佐藤和子  
 102 箒目の跡に風音桐一葉 佐倉 鈴木隆久  
 167 今日もまた誰かの忌日星流る 流山 穂刈照子  
 236 待つ人も待たる人もなき端居 静岡 杉澤 修  
 248 蜘蛛掃いて酒場灯せる薄暮かな 那覇 前田貴美子  
 250 夏の灯を小さく落して予後の水 那覇 前田貴美子  
 261 苦瓜をもぎて孤食の灯りかな 那覇 中本 清  
 268 溝浚へ角を曲がりて終ひとす 静岡 藤原千代子  
 275 古本に誰かの名刺夕端居 静岡 小川明美  
 368 背表紙の揃ふ本棚涼新た 金沢 清水英理子  
 385 青嵐カルテの白き余白かな 東京 齊藤孝夫  
 438 帯皺の上布の掛かる仏の間 町田 吉中愛子  
 457 大花野空わかちあひ風と鳥 金沢 伊藤美音子  
 459 滴りの岩に素彫りの忿怒仏 金沢 伊藤美音子  
 特 445 尻一つ空けて妻呼ぶ端居かな 川崎 大久保 進

評 「尻一つ空けて妻呼ぶ」にこのご夫婦の全てが語られて  
 いる。これからも心豊かな老後を悠々と送られることでしょ  
 う。

## 前田貴美子選

- 36 一村を山へ押しやり青田波 敦賀 鶴田勝子  
 50 大仏の背中を流す緑雨かな 伊勢原 佐藤和子  
 61 せせらぎや巻きやはらかき落し文 佐野 亀田やす子  
 73 ソーダ水去年と違ふ髪の色 七尾 谷渡末枝  
 99 踏み入りて見ゆる道あり草いきれ 佐倉 鈴木隆久  
 102 箒目の跡に風音桐一葉 佐倉 鈴木隆久  
 128 鍵をもて鍵穴探る晩夏かな 富士 神田美穂子  
 169 退屈な日の単純な扇風機 流山 穂刈照子  
 251 捺印に死がととのうてゆく晩夏 射水 成瀬真紀子  
 262 六月の龍舌蘭は供花と立つ 那覇 中本 清  
 313 花街の空家物件夾竹桃 那覇 高嶺容道  
 566 秋扇月の一字を畳みけり 横浜 榎本文代  
 571 算数を知ったかぶりのかき氷 那覇 稲嶺有晃  
 604 弔ひは初蛸の高音かな 金沢 杉本年虹  
 特 51 雨後といふ閑かな時間秋海棠 伊勢原 佐藤和子

評 特別な日の「閑か」さではない。日常の時の流れの中に  
 訪れ、感受する、ある日の「雨後といふ」「閑か」さだ。親  
 しくゆれる淡い紅色。「秋海棠」の明るさがいい。しづかな  
 調がいい。



# 令和七年度 「万象」全国俳句大会 作品集

- 1 雨のたびぐんぐん迫る草いきれ 松山 入河大河
- 2 雑草に飛び出る蛙焦げ茶色
- 3 蝸牛殻を押しやり角が出る
- 4 万緑の島に朝日の揺蕩ひぬ
- 5 束の間の雲間に出づや梅雨の月 町田 桔梗 純
- 6 若き母の越えし峠や苔清水
- 7 夾竹桃借景として父母の家
- 8 野面積の上に日の透くる紅葉かな
- 9 険しさの先黒百合の咲き誇る 敦賀 川口和代
- 10 汗滲む名医の腕に余生受く
- 11 青芒書家一筆に和紙揺るる
- 12 文字摺草愛猫の逝き闇の雨
- 13 七夕の紙縫りはぴんと真つ直ぐに 東京 久留島規子
- 14 甘酒をすする床几の老夫婦
- 15 足の爪鏝かけらるる溽暑かな
- 16 友逝きて胸にぼつかり百合の花
- 17 生身魂三途の川の釣りが夢 宇都宮 阿久津勝利
- 18 百疊に千枚を干す夏座布団
- 19 扇風機昭和の風を起しけり
- 20 生身魂の津軽三味線聞き入る夜

21 かなぶんの頬をかすむる羽音かな 東京一由久美子  
22 もう開かぬ父の棺に夏帽子  
23 糠雨に濡るる勅使の門涼し  
24 片耳の欠けし仏頭秋の声  
25 雲千々に九月の朝の始まりぬ 静岡萩野加壽子  
26 火の色の雨のしたたり曼珠沙華  
27 踏みしめて道となりたり蟻の列  
28 蚕豆に沈黙の口沖繩忌  
29 深雪晴れ生活厳し過疎の町 千葉松浦陵保  
30 退職の代行サービス四月馬鹿  
31 田植終ゆ能登の白米千枚田 しろよね  
32 みちのくの植田に映る鎮守様  
33 砂均す宮司の大き麦稈帽 敦賀鶴田勝子  
34 待ちゐたる夫の手術や旱星  
35 白雲に夢をめぐらせ合歓の花  
36 一村を山へ押しやり青田波  
37 見はるかす青田の奥や佐渡の嶺 新潟高野松風  
38 片陰やしづけさ昼の裏通り  
39 夏鴨の飛石亀と住み分けり  
40 目の前へはぐる蜻蛉の翹ひろげ

41 緑蔭の浅葱の卓布ハムサラダ 西原宮城 勉  
42 冷麺の淡泊すくふ竹の箸  
43 空蟬のかけ落ち水輪生みにけり  
44 千からびし詩藻うるほす蟬しぐれ  
45 病葉を踏みて世阿弥の配所跡 さいなま 山本右近  
46 はんなりと苦言の乗りし団扇風  
47 夏草や廃車の窓にキティちゃん  
48 相席にコロナの形見夏マスク  
49 飴色となりし籐椅子姉白寿 伊勢原佐藤和子  
50 大仏の背中を流す緑雨かな  
51 雨後といふ閑かな時間秋海棠  
52 看護師の引つ詰め髪の涼気かな  
53 再検は癌には非ず今朝の秋 静岡望月敏男  
54 七夕や「せかいへいわ」と幼の字  
55 隕石や客の夏帽見てをりぬ  
56 道祖神涼風の顔寄せ合へり  
57 丸洗ひされて汗疹の赤ん坊 金沢南 恵子  
58 小鳥来る買物メモに二重丸  
59 行き止りの路地や色なき風溜めて  
60 古書街やいつせいに鳴る江戸風鈴

- 61 せせらぎや巻きやはらかき落し文 佐野 亀田やす子  
 62 草庵跡囲む鉄鎖の灼けてゐし  
 63 稻の香や暮れかかる空もも色に  
 64 おはぐるとんぼ入る病院の自動ドア  
 65 我が人生四コマ漫画で完生す 佐倉 米田敏子  
 66 明易し店主も客もアロハかな  
 67 晩学は長生きの印敬老日  
 68 猛暑日や日本列島こげくさい  
 69 ひとり居てひとりの時間かたつむり 徳島 林 早苗  
 70 水を得て稲田を走る水馬  
 71 釣り船の水脈のきらめく薄暑かな  
 72 墨の色濃くしてまづは暑氣見舞  
 73 ソーダ水去年と違ふ髪の色 七尾 谷渡末枝  
 74 夜濯や大河ドラマのテーマ曲  
 75 さよならの影夕焼を大股に  
 76 生きとし生けるものに雄雌夏旺ん  
 77 出遅れてぎこちなき声朝の蟬 柏 村田由美子  
 78 炎天やテニスコートの声の消ゆ  
 79 七月尽電車待つ間の五七五  
 80 けふもまた素顔で過ごす猛暑かな

- 81 鉦のあと円空仏の笑み涼し 横浜 星野信子  
 82 雨の夜の赤きカクテル秋近し  
 83 夕風や白粉花は墓地に咲く  
 84 起きてなほ余韻にひたる春の夢  
 85 天然水を好む夫や汗の玉 大江 安藤桂花  
 86 この家で一番元氣なざるすべり  
 87 庭の草虎刈りのまま猛暑かな  
 88 雪溪の残る月山空広し  
 89 語り部のまづ水を飲む大暑かな 徳島 福島せいぎ  
 90 石庭にあそぶ寺の子裸の子  
 91 万緑や撒き餌に鯉の沸騰す 佐野 加藤季代  
 92 炎天へ心を先に踏み出せり  
 93 白桃を握ぐ一灯を消すごとく  
 94 新涼の風 足利学校 颯々と學校門  
 95 ふくよかな志功の媛や桃太る 佐倉 三屋英俊  
 96 首拍子手拍子かるく踊る輪に  
 97 裾の波おけさ踊ればし吹きけり  
 98 海鳴りや銀河無窮の闇底へ  
 99 踏み入りて見ゆる道あり草いきれ 佐倉 鈴木隆久  
 100 青葡萄未来に詩があるやうに

101 波に乗る海月はみんな孤で寂し  
102 簪目の跡に風音桐一葉  
103 身にしむやこれほど小さくなりし母 佐倉 鈴木美根子  
104 少しづつ麻酔覚めゆく水中花  
105 炎天へ塩飴ガリリ噛み砕く  
106 チューリップ悲しみ包む形かな  
107 レジを打つ九十歳の春帽子 柏 鹿毛満子  
108 大道芸手足も楽器花の下  
109 子の背丈気づきし朝夏に入る  
110 栈橋の柳押しやり舟を出す  
111 鰻屋の主一氣に目打ち打つ 敦賀 中川雅月  
112 備蓄米食べ比べする溽暑かな  
113 藻の花の湧水透けて治左の川  
114 曾良の忌や古刹の僧の萌黄色  
115 朝まだき何時目覚めるの合歡の花 札幌 松原智津子  
116 口すほめ乳吸ふ夢か昼寝の子  
117 夕間暮れ木槿散る道とほとほと  
118 白々と川波急ぐ秋の暮  
119 多羅葉や灼くる東京丸の内 足利 大木 茂  
120 滝見茶屋木彫り細工の値札褪せ

121 白銀の雲に雲積む青嶺かな  
122 手水舎に白き鳥鳴く秋初め  
123 足弱が小さき秋を見つけた 横浜 柳澤宗正  
124 虫の声休耕田の荒地より  
125 追ひ越さるばかりの散歩暮の秋  
126 御師の宿廃れしままや花八つ手  
127 沼晴れて蜻蛉浄土となり 富士 神田美穂子  
128 鍵をもて鍵穴探る晩夏かな  
129 今日大暑昨夜のがめ煮を煮返して  
130 ひたすらに胸抱き蟬の生れけり  
131 学長像番人めけり夏休み 金沢 今越みち子  
132 打水や料亭の木戸半開き  
133 稲の花はるか山に風車五基  
134 床の間の魚拓虎魚や波枕  
135 鳥の子の裸で遊ぶ手漕ぎ舟 徳島 福島吉美  
136 封筒で届く寄進の今年米  
137 島民を賄ふ清水寺に湧く  
138 村長に似し案山子立つ無人駅  
139 幾たびも慰霊の島へ梅雨の海 徳島 村上和義  
140 山の子の海の子となる夏休み

141 木偶の泣く農村舞台小鳥来る  
 142 七輪の煙追ひ立て秋刀魚焼く  
 143 留守の家植木に蜘蛛の巣が増えて 佐倉 杉田富美代  
 144 窓からの景色くもりて日除かな  
 145 半ズボン毛むくぢやらなる臍を出し  
 146 瓜漬の塩加減良し齒応え良し  
 147 大川の兩岸の絆大花火 東京 大場八朗  
 148 江戸からの改良重ねし火花かな  
 149 朝顔と鬼灯市は昔から  
 150 猛暑の日雷門の異邦人  
 151 烏瓜光を包み花閉ぢぬ 静岡 松永博子  
 152 青葉闇仁王の指の朱の残る  
 153 湧水にはらりとひとつ夏落葉  
 154 扁額の朱色の炎ゆる鬼子母神  
 155 来し方の駄菓子屋ぼつんと青田原 静岡 中澤祐一  
 156 蚊遣火を腰に結ひて慰霊祭  
 157 噴き上ぐる泉は富士の吐息かな  
 158 斜里岳を仰ぐ湿原蝦夷萱草 札幌 中鉢弘一  
 159 夏草や今穂やかにチャシの跡  
 160 朝焼を纏ふ尖峰利尻富士

161 夏雲や句碑の揮毫の筆太に  
 162 長瀬の舟下り見つかき氷 所沢 南雲秀子  
 163 ひまはりや駐在さんは巡回中  
 164 夕焼の豊旗雲に機影かな  
 165 蜘蛛の囿に搦めとられし狭庭かな  
 166 散るときは色淡くして蓮の花 流山 穂刈照子  
 167 今日もまた誰かの忌日星流る  
 168 蔓の先色なき風を探しをり  
 169 退屈な日の単純な扇風機  
 170 見るで無く噴水過る観光課 東京 長谷川信也  
 171 蕎麦の花赤ければ尚葉のみどり  
 172 夏大根息づく曇りポリ袋  
 173 うつつと紫陽花満つる夕べかな  
 174 無駄花の無きとや茄子の艶やかに 伊勢原 山本カツ子  
 175 野萱草水面に雲を走らせて  
 176 砂浜に声涌く子等の西瓜割  
 177 西行の鳶の細道からつ風 静岡 大長文昭  
 178 あらばしり不折の書なる瓶並ぶ  
 179 新築の家に先祖の魂迎へ  
 180 生藨を齧りし記憶敗戦忌

- 181 根こそぎの木木が岩打つ梅雨出水 静岡 本多ひとみ  
 182 鳴き止みて脳裏に残る蟬の声  
 183 小判草人の気付かぬ風ひろふ  
 184 水落す蟹の骸の色褪せて  
 185 思案橋梅雨を占ふ立葵 金沢 廣田宏美  
 186 青田風車窓にひやり通夜詣  
 187 真つ直ぐに振花しかと振れ咲く  
 188 西日差すうす紫に空暮れる  
 189 坊守の本音を聴くも盆用意 教賀 為永香月枝  
 190 白髪をばさりと切りて髪洗ふ  
 191 チャップリンの杖の一振り夏帽子  
 192 飛込台後退りの子入道雲  
 193 料理長の真つ赤なタイや夏旺ん 仙台 富田洋子  
 194 防人歌に筆の止まりし夜の秋  
 195 姥像の鎮座まします大花野  
 196 石切場に残る水場や螢草  
 197 越後野の田は黄緑や青田風 新潟 佐藤幸示  
 198 入道雲の下のがらが骨納め  
 199 風鈴の顔と音の無数一の宮  
 200 佐渡山に沈む夕日やピアパーティ

- 201 垣に沿ふ母の朝顔濃むらさき 新潟 本間悦子  
 202 茄子の牛たんまり桶の水を呑む  
 203 菖蒲田の一枚ごとに水引きて 佐野 芝宮留美子  
 204 青水無月手触りやさし木彫展  
 205 鮎の川八溝山地を横切れり  
 206 夕さりて白さるすべり映ゆる道  
 207 退院の身ぬち鎮もる月今宵 千葉 大月玲子  
 208 長き夜の夫の寝息に額づきぬ  
 209 寝間の子の息軽やかや月涼し  
 210 蟬しぐれ平和の鐘の何度でも  
 211 夏の潮列島沿ひを蛇行せり 酒々井 竹澤竹里  
 212 船宿の裏は南瓜の花盛り  
 213 青竹に打ち水をして辻廻し  
 214 月鉾へコンチキチンと兎跳ね  
 215 父の死後父と向き合ふ敗戦忌 東京 小池清晴  
 216 炎天やいつもの道の長きこと  
 217 来て帰るあつと言ふ間の盂蘭盆会  
 218 まだ冷めぬ日本列島炎天下  
 219 蜩の樹より暮色の広がりぬ 東京 中澤桃子  
 220 ブルーベリー摘む蚊遣火の煙る中

221 新聞紙の袋膨らむ葡萄かな  
 222 踊の輪浴衣に交じるスーツかな  
 223 吾亦紅辞める話のまた一人 東京高野翠子  
 224 一人部屋さがして追ひて蚊一匹  
 225 今朝の秋群青色のブラウスを  
 226 再会のショートカットや秋日和  
 227 広島忌原爆ドーム鏑深き 鎌倉恒川清爾  
 228 爽やかや巨船静かに進水す  
 229 瀧青く谷もろともに下りをり  
 230 胴太き飛行機空へ秋暑き  
 231 肝試し付き添ふ兄のすくむ足 大和中谷由郁  
 232 首拭ふ娘のレース母の綿  
 233 月明り溶くる波間の夜釣り船  
 234 夕立来てプール帰りの子らはしやぐ  
 235 葉桜の駅に吹かれて小半時 静岡杉澤修  
 236 待つ人も待たる人もなき端居  
 237 今日の汗遣ひきつたる野良仕舞  
 238 二の腕を枕に薦の三尺寝  
 239 湧水の真砂ぼこばこ川蜻蛉 静岡伊東文恵  
 240 日を集め風を吸ひ上げ合歡の花

241 水馬を捕ふる幼のまんまる目  
 242 廃校の中庭蓮の浮葉かな  
 243 離陸音響く砂浜海開 徳島宮西修一  
 244 心太昭和平成令和生く  
 245 夫と妻年の差五つ心太  
 246 きかんばうの子は母となり天瓜粉  
 247 太宰忌や鞆の底の煙草屑 那覇前田貴美子  
 248 蜘蛛掃いて酒場灯せる薄暮かな  
 249 遠雷や海は明るきまま暮れて  
 250 夏の灯を小さく落して予後の水  
 251 捺印に死がととのうてゆく晩夏 射水成瀬真紀子  
 252 ジップライン緑蔭抜けて風分けて  
 253 手提げより水やら飴やら団扇やら  
 254 尺蠖に何の遼巡立ち上がる  
 255 海霧を来て確と国後島見ゆる丘 札幌林陽子  
 256 滝落ちて胸のつかへを流しけり  
 257 北国の日の衰へし萩の風  
 258 木槿散る一つひとつに日の温み  
 259 春驟雨蛩十二戸にいくたびも 那覇中本清  
 260 午後からの風は海より青パパヤ

261 苦瓜をもぎて孤食の灯りかな  
262 六月の龍舌蘭は供花と立つ  
263 火山灰を濡らし卯の花腐しかな 宮崎中山 宣  
264 夏旺ん今まだ新燃岳燃ゆる  
265 黒瓦砂塵埃に喜雨の来て  
266 降灰に閉ぢたる部屋の暑さかな  
267 土用波小祠を祭る漁港ビル 静岡藤原千代子  
268 溝浚へ角を曲がりて終ひとす  
269 ハンモック鳥の目線に倣ひけり  
270 引鴨の富士川越えて列揃ふ  
271 川へ垂る青梅朝日纏ひをり 静岡水田公香  
272 時鳥神杉空を突くやうに  
273 噴水の青空目掛け弾けたり  
274 天からも地からも響く蟬時雨  
275 古本に誰かの名刺夕端居 静岡小川明美  
276 刃物屋の取説英語夜店の灯  
277 冬日没る坂東太郎ゆるぎなし 佐野島田和枝  
278 トンネルを越えし会津や桐の花  
279 高原のなべて黄菅や空青し  
280 それとなく生きて米寿や心太

281 風死すやちひさき雀死んでをり 東京平子甲奈  
282 半分の虹が夕餉のご馳走に  
283 ランナーのTシャツ眩し白南風て  
284 戦争と平和の綱引き夏が行く  
285 貝塚の縁に摘みたる三葉芹 札幌落合裕子  
286 チセ近き湖に暮色や星涼し  
287 稲の波たしか生家はあの辺り  
288 魚影濃き湖続ぶる尾白鷺  
289 柞抜け山並映す池塘かな 東京岡村純子  
290 瀬音して岩のくほみの曼珠沙華  
291 涼新たガイドブックと旅靴  
292 桃食みて香豊かな展望台  
293 駅迄の長き道のり百日紅 横浜岡元枝  
294 境内に咲き満つ堇樹木葬  
295 水遣りにきちきち飛蝗高く飛び  
296 秋暑し日暮賑はふ市場かな  
297 風鈴のうたふ回廊仏たち 小松島田上幸子  
298 雑草に隠る振花凜と立つ  
299 雨上がる四角くもゆる鶏頭畑  
300 葉の枯れし辺り新藓の試し掘り



- 301 深大寺のみやげを指に陶風鈴 栃木 上岡佳子  
 302 三更の星座觀察夏休み  
 303 揚花火の開き谷中湖黄の光  
 304 句会果つフロントガラスに虹の橋  
 305 炎天や地蔵に願ふぴんころり 柏 山本とく江  
 306 白南風や脚踏んばつて仔牛立つ  
 307 方丈に栗鼠の声聞く草田男忌  
 308 向日葵に見透かされたり吾が怠惰  
 309 擦れ違ふ華奢な女のサンガラス 徳島 山本瑤子  
 310 大夕焼渦の生まるる海峡に  
 311 濠端をひらひらひらと夏の蝶  
 312 日毎増ゆ終の住処の蟬の数  
 313 花街の空家物件夾竹桃 那覇 高嶺容道  
 314 草深に拾うて戻す蟬の殻  
 315 夏衣病者正座の祈りかな  
 316 熱帯夜命の水の微温みゆく  
 317 香りたつ泰山木蓮残る月 佐野 店網洋子  
 318 夏柳指で詠みたる芭蕉句碑  
 319 高原の夏の大三角形近し  
 320 美ヶ原薄雪草のしづくもて

- 321 熱帯夜五臓六腑に朝の粥 茅ヶ崎 久保田富士子  
 322 海風の大屋根リング夏燕  
 323 テラスにてフィッシュアンドチップ小島来る  
 324 阿壇の実慰霊の道に踏みしだく 宜野湾 宜野 顕  
 325 青蜥蜴病者手掘りの戦さ洞窟  
 326 書に耽る人の孤絶や晩夏光  
 327 若者の路上語り部広島忌  
 328 空蟬を集め少年少女の日 那覇 辺野喜宝来  
 329 八月の忌日あまたの黙の中  
 330 街角に祈りの時や原爆忌  
 331 甲板の学徒に深き処暑の闇  
 332 炎昼や男言葉の女生徒等 横浜 大駒泰子  
 333 青梅を挽ぎにおいでと二軒先  
 334 遠花火頬寄せて来るだつこの子  
 335 目高観て夕餉献立思案かな  
 336 友よりの台湾句集着く薄暑 静岡 岡田中秀幸  
 337 湧水のごと句の出でよ夏の空  
 338 夏風の西へ流るる茜雲  
 339 一杯の水有り難き原爆忌  
 340 門灯に透く葉脈や毛虫這ふ 静岡 飯田優子

341 雲流るひとり実家の端居かな  
342 秋茜香炉の煙を浴びるたり  
343 夕端居頭搔き搔き句帳手に  
344 埴輪の馬青野駆けたき脚太し 加須茂木弘子  
345 もう米を作らぬ田圃向日葵千  
346 坂東太郎酷暑の街を蛇行せる  
347 びつしりと白雲の湧く夏の果  
348 奉獻の剣の青へ風涼し 静岡長谷川洋子  
349 噴水の玉の煌き木々へ飛び  
350 本塁へ夏の球児の飛び跳ねり  
351 木道を八ヶ岳へと麦藁帽  
352 鳥の来て変はる鳴声秋の蟬 長崎丸本祥夫  
353 裏口は海へ石段雁渡し  
354 寺へ鳴る教会の鐘一位の実  
355 赤とんぼ南蛮通詞の太木戸門  
356 芝居はね街に繰り出す浴衣かな 香川県松井宣夫  
357 レジ袋抱へ向かふは雲の峰  
358 夕涼み壁に朽ちたる床几台  
359 安宿やシーツに残る染みと汗  
360 葎刈やバツサバツサと畑に寝る 数賀倉谷ます美

361 畑隅にのこす一本唐辛子  
362 故山きて変へぬ景色と花カンナ  
363 甘味屋の京の座敷の葎障子  
364 山笑ふ象の転がす丸太ん棒 静岡藤本節子  
365 読み止しの眼遊ばせ軒風鈴  
366 クレーンの均す残土や雲の峰  
367 淀みたる水面に白き未草  
368 背表紙の揃ふ本棚涼新た 金沢清水英理子  
369 異国語の短冊も入り星祭  
370 婦省子の白きTシャツ星に干す  
371 妣を真似妣のやりかた盆用意  
372 炎天を来てプラネタリウムの星の下 金沢松下信子  
373 烏一羽遅れ時へ晩夏光  
374 書棚よりワインボトルを星月夜  
375 盆の月築百年の屋根照らす  
376 能登の岩崩るも奇観夏夕日 金沢松田好子  
377 闘争の記憶の砂丘風死せり  
378 鮎つりの古老腰まで男川  
379 藁載せて厩を浸す夏出水  
380 石灰山に染み入る祇園囃子かな 佐野売野緑

381 雲の峰崩れゴジラになりにけり  
382 子等の声ミストの中の夏休み 東京 齊藤孝夫  
383 蛙乗せ帰宅の響きをトラクター  
384 リコリスと呼び名違へど彼岸花  
385 青嵐カルテの白き余白かな  
386 初夏の反りかへる赤グロリオサ 焼津 小梁洋子  
387 山城の麓に古刹仏手柑  
388 ひろしまや朝蟬の声滾らせて  
389 夏の雲湖の水面に湧き上がり 静岡 海野俊彦  
390 翔平の快音とどく雲の峰  
391 夢破る耳元の蚊耳障り  
392 夏怒濤大型船の清水港  
393 炎天へいづるや気合ひとつ入れ 益子 光岡れい子  
394 飛び石を五つ厠へ蚊遣香  
395 縁に座すひとりの句座や百日紅  
396 食前ののんどやさしき一夜酒  
397 青鷺の浅瀬飛び立つ空の青 白山 鶴尾正江  
398 加賀平野白さ群れしか蕎麦の花  
399 つる伸びて他の枝よりの昼顔かな  
400 空蟬や立木に止む爪の力

401 十一時二分の鐘や原爆忌 東京 江見悦子  
402 汗匂ふ原爆語る芝居小屋  
403 向き変ふる迅さよ寸の蜥蜴の子  
404 玻璃窓を雨伝ひたる晩夏かな  
405 盆提灯ともせば母の部屋になり 東京 藤田裕子  
406 門火焚く曲れるおゆび祖母に似て  
407 朝涼やピアスキらりと若き巫女  
408 墓守は吾のみとなりぬ草の花  
409 春愁ガザの柩にプレスの衣 三島 植村康子  
410 古杉に二人静の添ひ立ちて  
411 まつさらの天鷲絨めける夏の山  
412 小花散る木陰のをうな百日紅  
413 ミニトマト青き時間の長きこと 白山 朝倉みゆき  
414 鰻の日元気でいてと娘の便り  
415 震災の跡の家にもあいの風  
416 葛餅やつるんと口へ孫の笑顔  
417 原っぱに十葉の白一面に 船橋 近藤澄子  
418 果てしなき植田に風の通りけり  
419 畑中のばらに埋まるる農家あり  
420 えごの花そつと散りてゆく

421 酔ひ醒ます寄りし老女の六夜待 日野松原悦子  
422 きときとね訛ふとでる鍋かな  
423 啼く蟬の木肌に動くシルエツト 四街道 奥 太雅  
424 双蝶となりて昂る黒揚羽  
425 白鳥の羽交に覗くごつい脚  
426 いつしかに妻も覚ゆる浦島草  
427 百物語語る語部夏座敷 佐野義本美智江  
428 読みきかせの本を小脇に夏帽子  
429 和のいち字墨たつぷりと冬の宿 福岡園田清子  
430 雨上り映ゆる真紅のゼラニウム  
431 宇治川の赤き欄干梅雨晴間  
432 傘寿の夫自治会長を卒業す  
433 朝涼や球児の声に目覚めたる 佐野阿部 澄  
434 サークラインの紐のさゆらぎ夜の秋  
435 みんなの片寄せられし駅通路  
436 家中の音を掻き消す夕立かな  
437 一歩いつば足裏涼しき木の廊下 町田吉中愛子  
438 帯皺の上布の掛かる仏の間  
439 桃食みて命たのしむ八十路かな  
440 蟬生まる一瞬肩に力こぶ

441 夕暮の土星に懸り蛇の衣 横浜西本才子  
442 秋初め備前の壺の塵はらふ  
443 鳥居前ゆたかに揃ふ青田かな  
444 海原の小船の前をあご飛べる  
445 尻一つ空けて妻呼ぶ端居かな 川崎大久保進  
446 庭下駄の指の窪みや草の露  
447 球音を背に残暑のビール売  
448 煙突の消えし町並み月渡る  
449 長崎忌最後の被爆地で有れかし 千葉喜多恭仁子  
450 ハイビスカス涙の涸れぬ八十年  
451 幼き日泳ぎし海へ帰省せり  
452 夏の夢うちでのこづち振つてをり  
453 雨あがり風交差する青田かな 志木汐見克彦  
454 紫蘇の実のこぼれ散りつぐビルの陰  
455 山茶花の白そほ濡れし朝かな  
456 みはるかす宇宙のしじま白夜かな  
457 大花野空わかちあひ風と鳥 金沢伊藤美音子  
458 法螺の音の飴返しや滝開  
459 滴りの岩に素彫りの忿怒仏  
460 鵲の声止みて暮色の俄なり

461 姥捨の踏切照らす盆の月 東京 名和政代  
462 稲車真間の継ぎ橋通りけり  
463 無患子は一言主か山の影  
464 那谷寺へひと筋の道草紅葉  
465 振り返りまたねまたねと春深し 静岡 加山ひさ子  
466 梁組みを見上ぐる男風鈴鳴る  
467 度忘れを思ひ出したり砂糖水  
468 蟬時雨の真つ只中にひとりかな  
469 夏の蝶吾は嬉しも寄り来れば 東京 宮崎正義  
470 炎天下健気に咲きし白き芙蓉  
471 雨上がり虹をくぐるか夏つばめ  
472 十三夜あて持て来ませ我が友よ  
473 一駅を乗りて飛び立つ夏の鳩 船橋 久保村淑子  
474 夏休みじゅげむじゅげむと唱へる子  
475 夕暮の翡翠今日も川縁に  
476 雨煙る不来方城址櫓の花  
477 かまぼこ屋店それぞれの夏のれん 松田 古谷悠紀子  
478 高校野球熱風なりし応援歌  
479 夏霧のするする昇る丹沢嶺  
480 吸ふ息のなきごとと大気熱きかな

481 相老の一衣を足せり夜の秋 白山 加藤美栄子  
482 杣継ぐと滴りのこゑ分け入りぬ  
483 かなかなや千古の木霊還しつつ  
484 白山にあまねく座る天の川  
485 蔵の町祭太鼓の響きくる 佐野 仲山さよ子  
486 半披の男客へ団扇を配りたり  
487 朝採りの届く朝餉のコールスロー  
488 終戦日ラバウルからのハガキ読む  
489 村祭昭和に生きて小津映画 船橋 中嶋久登  
490 炎天や小さき影連れレストラン  
491 含羞草幾度も触るる小さき指  
492 綿昔の跨線橋越え風のまま  
493 坂の町千曲川へ傾く青胡桃 船橋 片桐帆一  
494 土用芽の楠の大樹や赤み差す  
495 野分中妻の見舞や道急ぐ  
496 七夕竹赤き折鶴結ぼほる  
497 夕焼を横切る竹刀袋かな 流山 沢辺たけし  
498 歩を合はすバージロード百合白し  
499 子の声を求めて森を親鴉  
500 八月や語部おもき口ひらき

501 笹叢を抜けて風来る今朝の秋 佐 合 横川良子  
 502 真菰積む自転車が行く盆の道  
 503 夏草の戦ぐばかりや曲輪跡  
 504 廃業の船宿に吊る秋簾  
 505 茶の間には戦のニュース髪洗ふ 静岡 石川裕子  
 506 廊跡冬木の桜棒立ちに  
 507 あね素直いもうと勝気花菜風  
 508 プロッコーリーの拳骨五つ無人店  
 509 参道へ散華さんげと辛夷散る 武蔵野 砂地宏子  
 510 夜桜や宴果てたる闇の色  
 511 雨しとど桜の黙と我の黙  
 512 開帳の列ながながと楓の芽  
 513 燈籠をそつと押しやる被爆川 佐 合 大内佐奈枝  
 514 道ゆづる山のあいさつ遠郭公  
 515 早田へ渡船の松の影伸びて  
 516 うかり出て老いに打たるる油虫  
 517 法華経寺白極めたる大蓮 四街道 塗木翠雲  
 518 オルガンのミサ曲流る浦上忌  
 519 仏壇の師に語りかく残暑かな  
 520 原爆忌原爆絵図に涙して

521 日の本は灼熱地獄原爆忌 横浜 小林愛子  
 522 縁側に脚をぶらぶら麦こがし  
 523 かなぶんぶん生きて潜れる棕櫚箒  
 524 浜施餓鬼御詠歌ひびくも哀れなり  
 525 着脱の下着のすべり溽暑なる 柏 古川京子  
 526 のびやかな牛の一声雲の峰  
 527 ニライカナイの晩夏へうちわ太鼓かな  
 528 流灯や平和の文字の沈みさう  
 529 青ぶだうフェンスに這へる保育園 柏 内田郁代  
 530 隠沼のわづかな日差未草  
 531 万緑の谷に赤錆ぶ高千穂線  
 532 夫の留守赫々として夏の月  
 533 大通公園ピアガーデンは超満員 札幌 土門 一  
 534 パナマ帽被りし写真セピア色  
 535 暑き日にニューオリンスズのジャズ恋し  
 536 二日酔い予防と気付ききゆうりもみ 札幌 土門 一平  
 537 車二台出せし車庫にて梅漬ける  
 538 クレーンはリモコン操作溽暑かな  
 539 命名の筆買ひに出づ秋日和 東京 下嶽孝一  
 540 白壁に映ゆる会津の柿すだれ

541 決め所作に男の艶や風の盆  
542 秋冷や運河にゆらぐ小櫓の灯  
543 鍬鎌を研ぐ音たしか盆の道 東京 草間三香子  
544 虫喰ひの手押しポンプや半夏生  
545 水替ふる金魚はねとぶ大盥  
546 賑はひに膨む在所盂蘭盆会  
547 天の川狼奉る山の上 東京 加賀葉子  
548 蚊帳吊輪鳴らしてたたむ朝一番  
549 みはるかす夕立雲より柱降る  
550 そつとひとり線香花火よ夕間暮  
551 春霖の明けて薔の割れにけり 門川 請関ゆかり  
552 朝顔の種を数へて子ら競ふ  
553 曼珠沙華残し刈り取る畦の草  
554 小蟠螂吾子の手の平鎌もたぐ  
555 手術場の涼気ガリバーがんにがらめ 札幌 岡本敬子  
556 祭り笛遠し病衣をゆるやかに  
557 振り棒ねぢりて採りぬ昆布採り  
558 コロボックル居さうな暗さ 螺湾路 ちやん  
559 風いつか変はりてゐたる晩夏かな 志木 中村千久  
560 釜めしに日日草を咲かす路地

561 或る人の面影揺るや水中花  
562 妖しきは夜闇のカサブランカの香  
563 裏木戸の閉ざされ烏瓜の花 横濱 榎本文代  
564 雲の峰鉄が鉄打つ音ひびく  
565 早雲寺雨に玉解く芭蕉かな  
566 秋扇月の一字を疊みけり  
567 精悍な精霊馬を遣しぬ 東京 安藤美酒々  
568 新盆の良太師迎へむ UFO で  
569 西瓜切る小玉の種はいと小さし  
570 水引の花に閉ざさる勝手口  
571 算数を知つたかぶりのかき氷 那覇 稲嶺有晃  
572 秋草やきよりゆうがにいるほぐいる  
573 社へと絵馬の続きて秋の空 新潟 齋藤 信  
574 杖つかぬ母の歩幅や秋の風  
575 みんなの被爆せし木を鳴きつづく 酒々井 小林あけみ  
576 晩夏光浦へ戻りし帆かけ舟  
577 向日葵の千の声聞け空の青  
578 終戦日ガラスのうさぎ知らぬ子ら  
579 だら焼きに鯉の焼印みどり射す 那珂川 高山ひさ子  
580 ごめんねと袋に毛虫閉ぢこめぬ

581 日に三度姉の電話や四葩咲く  
582 髪切つて西日浴びたる頃かな  
583 稲の秋メコンを渡る象の群 金沢 豊田高子  
584 万緑や竿いつばいに産着干す  
585 曙光や山氣を開く朴の花  
586 灯の雫星のしづくや橋涼み  
587 烏瓜のつぼみ立ちたる宵の口 佐野 増田幸子  
588 空蟬のすがる木鼻の獅子頭  
589 生身魂昭和歌謡を口遊み  
590 水馬浮葉にのりて身じろがず  
591 朝飯や顔の揃はぬ夏期休暇 燕 渡辺志ま  
592 耳穴の掃除を確と夏終る  
593 十代はもつと食べよと生身魂  
594 帰る靴遅れ来し靴孟蘭盆会  
595 ひとり居の箸のすすまぬ酷暑かな 船橋 宮本加津代  
596 もてあますほど物余り終戦日  
597 鬼灯のよく赤らんで供花とする  
598 雨止めば又屑々と蟻の列  
599 夏館フルートに和む同窓会 立川 疋田華子  
600 秋暑しおそき昼餉の塩むすび

601 路地の菊きりりと括る暮しかな  
602 伊達男帽子にさせる初紅葉  
603 風を見て幼駆け出すいかのほり 金沢 杉本年虹  
604 弔ひは初蜩の高音かな  
605 赤皮南瓜母の味には似て非なる  
606 陶枕の青き山水閨の閑  
607 火渡りの足裏を洗ふ清水かな 金沢 北川禮子  
608 星空へ響く一管薪能  
609 水匂ふ閨に螢の金の糸  
610 神苑の初音清かに綾子句碑  
611 油照り足場組まるる音にぶく 福岡 宮田千恵子  
612 春の日や画鋏の穴の黒ずみて  
613 ビル街をかくしたりけり夕立雲  
614 雷を連れて帰りし盆参り  
615 天窓より猫の顔出す夜の秋 横浜 加藤和子  
616 折紙を教へる園児の髪涼し  
617 山の宿先づ一番に水所望  
618 身に余る雀は夜盗虫啗へ飛ぶ  
619 巢穴口思案気になる蟻二匹 市川 奥澤よし江  
620 波の音少し高まり風に秋



621 青年の氣遣ひに会ふ青岬  
622 集落を過ぎて牛舎の夏つばめ  
623 櫂の波小さし舳先の蜻蛉かな 千葉 田中道江  
624 星の息風の息あり実朝忌  
625 涼風至朝市は飛驒ことば  
626 秋出水受話器押しつけ問ふ安否  
627 神域の閭幾百の蟬の羽化 金沢 中條睦子  
628 純子忌や消えんとして濃き夕焼  
629 老いよいよ蚊を仕留めたる平手打ち  
630 本棚の林中にゐて秋隣  
631 短冊の師の文字涼し寺座敷 金沢 高田たみ子  
632 鐘樓へ日ごと伸びたり花南瓜  
633 先頭は村の悪がき虫送り  
634 採血の血管太く夏の果  
635 開け放ち児と寝る生家青田風 日野 喜多尾明子  
636 短夜やコハイオハナシしてと云ふ  
637 日盛や死にゆく鳥はまなこ開け  
638 飲み止しのグラスがふたつ星涼し  
639 人混みにリュック抱へし今朝の秋 横浜 三宅芳枝  
640 漁火を顎で数へし秋の海

641 喜寿の日は通夜となりけり秋時雨  
642 結納に鼓打ちけり昼の月  
643 担ぎ手なくトラックに乗る神輿かな 横浜 大橋雅子  
644 向日葵の小花を浮かべ花手水  
645 無花果の熟して黒し村外れ  
646 境内に軽音楽やかなかな鳴く  
647 始皇帝の墓をめぐれり韭の花 町田 広瀬俊雄  
648 炎熱の砂漠に埋もる嘉峪関  
649 長城の土塊となり女郎花  
650 莫高窟砂漠の菩薩涼しけり  
651 緑蔭に影沈ませてねむる犬 東京 桑原優美子  
652 炎天に無口の列に並びけり  
653 をさなごの白く輝く夏帽子  
654 炎天へ自転車を押す配達夫  
655 手術後に見し夏空の美しき 横浜 豊美佐子  
656 ホウリヤーと女神輿や秋祭  
657 迷い込む壁に激突黄金虫  
658 長き夜の身辺整理きりもなく



## 御礼とご挨拶

令和7年度「万象」全国俳句大会の開催に際して、大会作品を募集しましたところ、全国から、多数の作品が寄せられました。本日「万象」11月号に合冊の形で、作品集を皆様にお届けできますことは、大会実行委員会ならびに編集部一同の大きな喜びでございます。応募いただきました皆様には、深く感謝申し上げます。

今回の作品集の作成に当たっては、東京支部俳句スクールの有志の皆様にご尽力いただきました。投句の受付を担当して下さいました一由久美子さん、校正作業に携わって下さいました藤田裕子さん・桔梗純さん・松井宣夫さん、そして作品集の編集作業の責任者として一切をとりまとめて下さいました久留島規子さん。それぞれ多大な努力と時間を費やして頂きましたことに、改めて御礼申し上げます。

作品につきましては、校正の段階で漢字の表記を「万象」誌の基準に則って修正したほか、誤字・誤表記などについても若干の修正を加えさせていただきました。

最後になりましたが、お忙しい中、選句をお引き受けいただき、特選句への選評も頂戴いたしました選者の皆様、真にありがとうございます。この場を拝借して、厚く御礼申し上げます。

「万象」編集長 大会実行委員長

中村千久



9390364

射水市南太閤山13  
|  
24

# 万象作品投句係行

110円切手を  
貼ってください

氏 名	住 所

〈通信欄〉

## 編集後記

▽俳誌の編集と刊行には二か月のずれがあるのは致し方ないけれど、8月号に門松の句、新年号に入道雲の句はいただけませんね。同人、会員を問わず、掲載号の季節に、少しでも近い作品の投句を心がけてまいりましょう。

(千人)

▽今年の富士登山シーズンが終わり、7月10日の山開きから連日海拔0mから徒歩での登山者を多く見かけた。又、連日地元紙に富士山での遭難、怪我、体調不良者等の記事が載った。その記事の最後に必ず、「天候や体調に不安を感じたら無理をせず下山して欲しい」と結んであった。(美穂子)

▽11月は私にとって不思議な月だ。冬の日差しと抜けるような青空、冬の本格的な寒さは感じられない。一年で一番落ち着ける月でもある。しかし、綾子先生の句(峠見ゆ十一月のむなしさに)が心に響く。秋櫻子の(啄木鳥

や落葉をいそぐ牧の木々)も。(宏子)

▽広い庭ではないが、毎日のようにヤブガラシを引き抜いている。ヘクソカズラも負けじと顔を出す。どちらも放っておくとたちまち傍の木を覆ってしまう。もうひとつヤマノイモの蔓も出てくる。こちらは秋に零余子を摘むのを楽しみにしているが、区別のつかない夫についつい抜かれてしまう。

9月の今、ヤブガラシにもヘクソカズラにもかわいい花が咲き、蜂が訪れている。

藪枯らし屁糞葛も花つけぬ(明子)

▽本年は浮世絵師・葛飾北斎の生誕265年に当たると言う。70代半ばで発表した「富嶽百景」の後書には、一段と画業に励みゆく決意を込めて「八十歳になればますます進み、九十歳で奥義を極め」と綴り、その後90歳で最高傑作の一つと評される「富士越龍図」を完成させている。我が同人の方々の、年齢を重ねても尚、矍鑠と活動されるお姿に敬意を表します。(孝二)

## 会員を募ります

会員は左記の会費(誌代)を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万 象 俳 句 会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

## 万 象 十一月号

第二十四巻 第八号  
通巻 第二八四号

令和七年十一月一日 発行

主 宰 江 見 悦 子  
発行人 江 見 悦 子  
編集人 中 村 千 久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一三ー一六ー603

万 象 発 行 所

☎〇三六三二四一五七九六

万 象  
第二十四卷  
第八号  
(通卷二八四号)

平成十四年十一月十三日 第三種郵便物認可  
令和七年十一月一日発行  
(毎月一回一日発行)